仮面ライダー　エターナル＝インフィニティ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー　エターナル＝インフィニティ

【Ｎコード】
Ｎ７９８２Ｗ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ライダー達の前に現われる異なる世界からの者達。彼等は何故ライダー達の世界に来たのか。
ライダー達とそれぞれの世界の戦士達のクロスオーバー作品です。

参戦作品

仮面ライダー　エターナル

＝インフィニティ
参戦作品
仮面ライダークウガ
仮面ライダーアギト
仮面ライダー龍騎
仮面ライダーファイズ
仮面ライダー剣
仮面ライダー響鬼
仮面ライダーカブト
仮面ライダー電王
仮面ライダーキバ
仮面ライダーディケイド
仮面ライダーダブル
仮面ライダーオーズ
仮面ライダーフォーゼ

百花繚乱サムライガール
戦国乙女
祝福のカンパネラ
魔法少女まどか☆マギカ
フリージング
ＩＳ－インフィニティ＝ストラトスー
これはゾンビですか？
バカとテストと召喚獣
バカとテストと召喚獣にっ！
ドラゴンクライシス！

にゃんぱいあ
探偵オペラミルキィホームズ
ＤＯＧＤＡＹＳ
緋弾のアリア

第一話　集うライダー達その一

第一話　集うライダー達

紅渡はこの時町の中にいた。名護啓介も一緒だ。
名護はその紅にだ。鋭い目で言った。
「確かにいたな」
「はい、ここにいました」
紅も鋭い目になり名護の言葉に答える。
「何かがここに」
「いた。しかしだ」
「あれは何だったんでしょうか」
「何だと思う」
名護は己の隣にいる紅の顔を見ながら彼に問うた。
「あれは」
「少なくとも今出ているグリードじゃないですね」
「そうだな。そしてドーパメントでもない」
「どちらでもないですね」
「あれは。むしろ」
「悪霊だよな」
キバットがだ。二人の周りに出て来て言う。
「そうした感じの奴だったよな」
「そうだ。あれは悪霊だ」
名護は確かな声でキバットの言葉に頷いた。
「虚ろな白い姿、そして底知れない悪意」
「それってまんま悪霊の特徴だしな」
「悪霊、それを操る存在か」
「それが僕達の今度の相手でしょうか」
紅は怪訝な顔になり名護に問い返した。
「グリード以外の」

「そうなのだろうか」
紅の言葉にだ。名護は顔を顰めさせてだ。
そのうえでだ。こう言ったのだった。
「違うかも知れない」
「違いますか？」
「この悪霊の様なものは今まで我々が戦ってきた相手とは全く違う」
「それは確かですね」
「そうだ。何もかもが違う」
「物理的な攻撃は効きますけれど」
しかしだ。それでもだというのだ。
「何かが決定的に違いますね」
「この世界に元からいるのか」
名護はこうも考えた。
「そして我々の前に来ているのか」
「といいますと」
「あの悪霊は我々の世界のものとは全く違う」
名護は目を鋭くさせて紅に話す。
「他の世界から来たのではないのか」
「違うとなると一体」
紅は名護の言葉に首を捻りだ。そうしてだった。
怪訝な顔になりだ。名護に問い返した。
「他の世界、他の世界から出て来た」
「そうした存在か」
「ディケイドがそれぞれの世界を回りましたけれど」
紅はこのことからだ。推理していき名護に話していく。
「その世界の何処からか来たんでしょうか」
「その可能性はあるな。だが」
「だが？」
「ライダーのいない世界もある筈だ」
名護もまた推理を働かせながら話す。

「その世界の何処からか来たのだろうか」
「あの悪霊達は」
「まだ確信はできない」
決め付けはできない、そうだというのだ。
「しかしだ」
「怪しいですか」
「そう思う。あの悪霊はこちらの世界の存在には思えない」
それはだ。どうしてもだというのだ。
「ではどの世界から来たのか」
「そうした話になりますね」
「少なくとも今回のこともスサノオは関わっている」
「そうですね。それは間違いありませんね」
このことは名護だけでなく紅も確信できた。何故ならライダー達が戦う理由はスサノオと戦うことだからだ。それでこのことは確信できたのだ。

第一話　集うライダー達その二

そしてスサノオはあらゆる世界で仕掛けてきている。そのことも知っているからだ。
名護も紅もだ。スサノオの陰は確信できた。
それでだ。紅はこんなことも話した。
「じゃあ今度あの悪霊が出て来たら」
「その時はか」
「少し調べますか？」
名護に顔を向けて提案する。
「あの悪霊の何かしらの手掛かりを手に入れて」
「そうだな」
名護もだ。紅の言葉に頷く。
「そのうえで決めよう」
「そうしましょう」
「ああ、それでだけれどな」
キバットがだ。また言ってきた。
「ひょっとすると悪霊だけじゃないかも知れないぜ」
「悪霊だけじゃないって？」
「何か他の妙な気配も感じるんだよ」
そうだというのだ。
「何かな。こっちに来てるな」
「こっちに？」
「とりあえず花鳥に行こうぜ」
その喫茶店に行こうというのだ。
「あそこにな」
「花鳥に？」
「ああ、そこに他のライダー達の誰かが来てる筈だからな」
それでだ。そこだというのだ。

「そこで話を聞こうぜ」
「確か今あそこには」
今度はだ。タツロットも出て来た。そのうえで紅と名護に話すのだった。
「城戸さんと秋山さんがいますよ」
「あの人達がいるんだね」
「そうか。彼等が」
「はい。ですからそこに行きましょう」
また話すタツロットだった。
「それで情報収集といきましょう」
「それがいいな」
「そうですね」
名護が最初に言い紅が頷く。
「じゃあ兄さんにも連絡します」
「彼も悪霊達と戦っているのか？」
「ちょっと待って下さい」
紅は自分の携帯を取り出してそのうえで兄である登太牙に連絡を入れる。そのうえで耳元に当てる。そしてわかったことは。
彼はだ。電話の向こうの兄に問い返した。
「えっ、そっちには？」
「そうだ。悪霊ではなかった」
「それで出て来たのは」
「妖しい女だった」
それだったというのだ。女だとだ。
「奇妙な術を使う女だった」
「女！？グリードでも悪霊でもなく」
「女だ。何かに変身することもなかった」
電話の向こうの登は弟にさらに話す。
「だが力はかなりのものだった」
「そうだったんだ」

「あれは間違いなく只者ではない」
登はこうも言う。
「言うなら魔人が。実際に俺一人では危うかった」
「兄さん一人では」
「五代さんが来てくれた」
そのだ。五代の力も借りてだというのだ。
「それで何とか退けたが」
「けれどその女の正体は」
「わからない」
登の返答は紅が予想したものだった。
「全く。何者かも」
「じゃあ兄さん、とりあえずは」
どうしたいか。紅は兄に話した。
「花鳥に来てくれるかな」
「あの店か」
「うん、あの店でね」
集まりだ。そうしてだというのだ。

第一話　集うライダー達その三

「話をしよう」
「そうだな。それがいいな」
「じゃあ。僕達も今から行くから」
こう話をしてだ。そのうえでだった。
紅は登との電話のやり取りを終えた。そうしてだ。
携帯を切ってポケットの中に入れてからだ。名護に顔を向けて言った。
「じゃあ今から」
「花鳥に行こう」
「けれど。女ですか」
「それだよな」
ここでまた言ってきたキバットだった。
「俺さっき妙な感じがするって言ったよな」
「それがそうなのかな」
「そうかもな。とりあえず今はな」
「グリード以外にも」
「ああ、ひょっとしたら今回かなり大掛かりに話になるかもな」
キバットはふとこんなことを言った。言いながら紅の傍をホバリングしている。
「派手な戦いにな」
「その可能性はあるな」
名護も言う。
「これまで以上にだ」
「折角グリードとの戦いが一段落してきそうなのにですか」
タツロットはこのことを残念に思いながら話す。
「今度はもっと派手にですか」
「それが僕達の戦いだけれどね」

紅は自身のライダーとしての運命を受け入れながら話す。
「だから。仕方ないよ」
「そうだよな。スサノオが諦めるか完全に滅ばない限りな」
どうかとだ。キバットも言う。
「永遠に続くよな」
「それは受け入れるしかない」
名護もそのことは受け入れていた。既にだ。
そうしてだった。そのうえでだった。
彼等は花鳥に向かうのだった。そうしてだった。
花鳥に着く。その内装よりは広い喫茶店の中を見回すとだ。
そこにもう登がいた。彼以外にも。
城戸真司に秋山蓮もいる。二人は紅達が店に入るとすぐに彼等が立っているカウンターの中からだ。こう言ってきたのだった。
「おい、話は聞いてるよな」
「また出て来た」
「はい、今度は女らしいですね」
「それもかなり妖しい」
「俺達も悪霊と戦ってきたところだよ」
「しかしだ。ここでだ」
城戸と秋山は二人に応えながら話していく。
「そんな訳のわからない女まで出て来てな」
「話はさらにややこしくなってきた」
「そうだ」
その通りだとだ。ここでカウンターの席に座る登も話す。
「とにかくおかしな女だった」
「それでどうした女だったのだ」
名護はカウンターに向かいながら登に尋ねる。
そうして彼の隣の席に座りだ。それからだった。
まずは城戸と秋山にコーヒーを尋ねてだ。再びだった。
「妖しいことはわかるが」

「ちょっと聞かせてくれるかな」
紅も登の隣に来た。彼が右で名護が左でだ。登を挟んだ形になる。
そのうえで彼は紅茶を頼んでだ。兄に尋ねたのだった。
「どんな女だったの？」
「右目に眼帯をしていた」
登はまずはそこから話した。
「そして白髪を後ろに長く伸ばし」
「白い髪を」
「そうして伸ばしていたのか」
「丈の短い高校生の制服に唐草模様を思わせるストッキングに手袋をしていた」
ここまで聞いてだ。コーヒーと紅茶を淹れていた城戸と秋山が言った。
「何かそれってよ」
「一度見たら忘れられない姿だな」
「俺もそう思った」
その女と戦っただ。登自身もそうだというのだ。

第一話　集うライダー達その四

「そしてその力はだ」
「力も」
「かなりの強さなのか」
「そうだった。刀を使っていてかなりの腕だった」
それこそだ。ライダーとなった登を以てしてもだったのだ。
「ダークキバになっても俺の方が押されていた」
「ダークキバになった兄さんでも」
「そこまで強かったのか」
「五代さんがいなければ」
そのだ。共に戦った彼がいてくれたからだとも話すのだった。
「退かせることすらままならなかった」
「おい、それって洒落にならないだろ」
「そこまでの強さなのか」
城戸と秋山もだ。そこまで聞いてだ。
唸る様に言ってだ。そうしてだった。
「何か悪霊が増えただけでも厄介なのにな」
「また出て来たか」
「それで何者なんだよ、その妖しい女は」
城戸は腕を組みながら首を捻る。
「まあスサノオが関係してるのは察しがつくけれどな」
「それは間違いないな」
秋山もそのことについては同意だった。
「俺達の前に出て来たのならな」
「だろうな。ドーパメントの次はグリードでな」
「悪霊も出て来たと思ったが」
「今度は女かよ」
「敵が増える一方だ」

「何かよ。このまま増えるとな」
どうなるか。城戸はまた話す。
「そのうちどうにもならないことになるんじゃねえのか？」
「少なくともそうはさせない為にだ」
どうかとだ。秋山はコーヒーを淹れながら話す。
「俺達がいるからな」
「だよな。じゃあとりあえずはな」
どうかとだ。城戸は紅茶を淹れ終わってだ。紅に出してからだ。
そしてだ。また言うのだった。
「その女とも戦うか」
「それでだが」
名護はだ。ここまで聞いてだ。
そのうえでだ。こう登に尋ねた。
「その女は何処に去ったのだ」
「去った場所か」
「そこに案内しなさい」
いささか命令口調でだ。登に言う。
「そうして実際にまた戦えば色々とわかる筈だ」
「だよな。これまでスサノオが関わって外見が人間の奴ってな」
「いなかったからな」
城戸と秋山もだ。このことについて指摘する。そうしてだった。
ここまで話してだ。彼等もだった。
「とりあえず登、いいか？」
「女が去った方に案内してくれ」
「わかった。そこはだ」
何処なのか。彼が言おうとするとだ。
不意にだ。城戸の携帯が鳴った。それで出るとだ。
「おい、今どうしている」
「何だ、乾かよ」
「そうだ、俺だ」

こうだ。乾が彼に携帯で言ってきたのだ。
それでだ。彼が言うことは。
「今草加や三原と一緒に埼玉アリーナの方にいる」
「そこで悪霊が出たのかよ。それともグリードか？」
「いや、女だ」
その言葉を聞いてだ。そこにいた全員がだった。
眉を顰めさせだ。乾の話に注目した。
「女！？」
「まさか」
「片目の白い髪の女だ」
また言う乾だった。
「その女が出て来て今から戦うところだ」
「御前等三人だよな」
「ああ、とりあえずいけると思うがな」
「今からそっち行っていいか？」
女の外見まで聞いてだ。城戸は乾にすぐに言った。

第一話　集うライダー達その五

「埼玉アリーナの方にな」
「何かあるのか？」
「ああ、あるんだよ」
あるから行くというのだ。
「だからな。今からな」
「そうだな。女だけじゃない」
ここでだ。さらにだった。
「悪霊まで出て来た」
「悪霊までかよ」
「俺達三人だけじゃ辛いかもな」
乾は冷静に分析して述べた。
「悪霊達も出るとな」
「数はどれだけいるんだ？」
その悪霊の数をだ。城戸は尋ねた。
「一体」
「百、いや二百はいる」
乾はその数についても答えた。
「かなりの数だな」
「わかった。じゃあ今すぐ行く」
城戸は乾に対して即答した。
「ちょっと待っていてくれ」
「女は俺達が相手をする」
乾達でというのだ。
「悪いが悪霊達はな」
「任せろ。それじゃあな」
こう話してだった。城戸は携帯を切り自分のズボンのポケットに収めた。それからだ。

紅達に顔を戻してだ。こう言ったのだった。
「おい、それじゃあな」
「そうだな、すぐに埼玉アリーナに行くぞ」
「そこですね」
秋山と紅が応える。そうしてだった。
彼等はすぐに店を出てだ。それぞれのバイクで埼玉アリーナに向かった。バイクを飛ばしその前に来るとだ。既にだった。
登が言ったそのままの姿の女がだ。三人のライダーと戦っていた。彼等は埼玉アリーナの入り口のところでだ。女と戦っていた。
仮面ライダーファイズと仮面ライダーカイザがだ。仮面ライダーデルタのフォローを受けながら片目の女と戦っていた。しかしだ。
ファイズとカイザが正面から攻撃するが。それでもだった。
「甘いわね」
「くそっ、これでも駄目か！」
「今の攻撃も効かないのか」
ブレイドの攻撃を弾き返されてだ。ファイズとカイザはそれぞれ悔しさに満ちた声を出した。
そしてだ。デルタもだ。
その両手に持つ銃で撃とうとする。しかしだった。
ビームをあえなくかわれた。それを見てだ。
「くっ、またか！」
「無駄だ三原」
カイザがデルタに対して言う。
「こいつに銃は通じない」
「見切ってるっていうのか！？」
「そうだ。間違いない」
カイザは女と間合いを取りながら話す。
「こいつは既に見切っているんだ」
「じゃあどうすればいいんだ」
「このまま攻めるか？」

ファイズが二人のライダーに問うた。
「そうするしかないか？」
「いや、それは駄目だ」
カイザがすぐにそれは駄目だとした。
「さっきやっても何の効果もなかったな」
「ああ」
「俺達のブレイドではこの女の剣には勝てない」
「そうだな。忌々しいがな」
「こいつは剣の達人だ」
カイザはそのことをもう把握していた。戦いの中で。

第一話　集うライダー達その六

「かといっても下手な距離じゃ銃も見切る」
「じゃあどうすればいいんだよ」
デルタが二人のすぐ傍まで来て問う。
「このままじゃラチが明かないぞ」
「こっちは三人だ」
しかしだ。ここでだった。カイザはこう言ったのだった。
「三人いる。相手は一人だ」
「オルフェノクの王と戦った時と同じだな」
その状況を聞いてだ。ファイズは言った。
「そうだな」
「そうなる」
「じゃあどうするんだ。今は」
「いいか、乾君はだ」
ファイズを見てだ。カイザは告げた。
「正面からブラスターモードで向かえ」
「あれでか」
「俺は奴の右に回る」
カイザはそうするというのだ。そしてさらにだった。
「三原、君は奴の左だ」
「三人で囲んでそれでか」
「一斉に攻撃を浴びせる」
そうするというのだ。
「それでどうだ」
「少なくとも今までよりはいいな」
ファイズは女を見据えて言葉を返した。
「目くら滅法に仕掛けるよりはな」
「そうだ。この女が何者かは知らない」

それはカイザにもわからないことだった。
「だがそれでもだ」
「こいつもやっぱり」
「スサノオの縁者だ。間違いなく」
「あら、知っているのね」
スサノオという名前を聞いてだった。女は。
悠然とした笑みになってだ。こう三人に言ってきたのだった。
「あの方のことを」
「あの方だと！？」
「ではやっぱり貴様は」
「スサノオの」
「あの方に導かれてここに来たから」
それでだ。知っているというのだ。
「素晴らしい方ね。あの方は」
「糞野郎だ」
ファイズは女がスサノオを褒め称える言葉を言うのを聞いてだ。
吐き捨てる様にしてだ。そのうえで言い返したのだった。
「あいつだけはな」
「話は聞いているわ」
女は三人にこうも言ってきた。彼等の周りには無数の悪霊達が蠢いている。彼等の間合いは間も無くファイズ達を掴めるところにまで達していた。
その中でだ。女は悠然として言うのだった。
「あの方からこちらの世界のことをい」
「こちらの世界！？」
「今確かに言ったな」
まずはファイズとカイザがだ。その言葉の意味に気付いた。
「ということは」
「こいつはやはり」
「そうよ。元々はこの世界の人間ではないわ」

その通りだとだ。女は言い切った。
「私達の世界では侍がまだいるのよ」
「侍！？」
デルタがそれを聞いて言う。
「侍がまだいる世界」
「そうよ。その世界から来たのよ」
「言っている意味がわからないな」
ファイズは女の言葉を聞いてまずはこう言った。
「侍がいる世界。シンケンジャーとかいう連中じゃないな」
「シンケンジャー？」
その戦士達については女は。
怪訝な声になってだ。こう言うのだった。
「彼等のことは知らないわね」
「そうか」
「私達の言う侍は生身で刀やそういったものを手にして戦う存在」
「昔ながらの侍だな」
カイザは女の話を聞いてこう察した。

第一話　集うライダー達その七

「そういう存在がか」
「私達の世界の侍よ」
「相変わらず話はわからないが」
ファイズは女の話を最後まで聞いてまずはこう返した。
「少なくとも御前がこの世界の奴じゃないことはわかった」
「そしてスサノオと関わりがある」
カイザが指摘したのはこのことだった。
「その二つは確かだな」
「その通りよ」
「じゃあ御前は何者なんだ？」
「私が何者か、というのね」
「そうだ。何者だ？」
「柳生」
女は名乗った。
「柳生というのよ」
「柳生！？というと」
柳生と聞いてだ。カイザは。
いぶかしむ声になってだ。こう女に問い返した。
「あれか。かつて江戸幕府に仕えた柳生家の」
「あの家か」
「確か剣豪も生み出した」
ファイズもデルタもだ。柳生家のことは知っていた。
「あの家の人間か？」
「まさか」
「しかしこの世界の人間ではない」
カイザはこのこともだ。話したのだった。
「違う世界の柳生家の女だな」

「そうなるわ。それにね」
「それに？」
「今度は何だ？」
ファイズとデルタが今の女の言葉に問うた。
「一体」
「何だっていうんだ」
「貴女達が戦っているこの者達は」
今彼等の前にいるだ。その悪霊そのものの連中のことだ。
「何と呼んでるのかしら」
「悪霊じゃないのか？」
「そうじゃないのかな」
ファイズとカイザが答える。
「そうとしか思えないんだが」
「違うというのかな」
「悪霊ね。言い得て妙ね」
その呼び方はだ。女も悪くはないとした。
しかしだ。女はだ。こう言ったのだった。
「けれど違うわ」
「この連中は悪霊じゃなかったのか」
「近いわ」
近いことは近いとだ。女はデルタに答えた。
「けれど。彼等は悪霊じゃないのよ」
「じゃあ何だ」
ファイズは女を見据えて問う。その周りには今もだ。その者達が迫ろうとしている。
「この連中は」
「魔獣」
女はこう言った。
「彼等は魔獣というのよ」
「魔獣！？」

「この連中は魔獣」
「そう呼ぶのか」
「彼等の世界ではそう呼ばれているわ」
そうだとだ。女は三人のライダー達に答えた。
「彼等はね」
「彼等の世界、か」
カイザはこのことに反応を見せた。
そのうえでだ。また女に問うたのだった。
「では御前とこの連中はそれぞれ違う世界にいるんだな」
「その通りよ」
「複数の世界からこの世界に介入してきている」
カイザはこうも言った。

第一話　集うライダー達その八

「そういうことだな」
「頭の回転が速いわね。全てはそのままよ」
「ということはだ」
「スサノオは複数の世界から送り込んできている」
ファイズとデルタにもだ。このことがわかった。
「そういうことか」
「つまりは」
「そうよ。貴女達も結構頭がいいわね」
「頭が悪ければな」
「とっくの昔に死んでいるからな」
「そうね。それに」
しかもだとだ。女はまた言った。
その言葉と共にだ。今だった。
紅達がだ。この声をあげてだ。
「変身！」
「変身！」
それぞれその言葉と共にだ。ライダーに変身してだ。
魔獣達に突き進みだ。薙ぎ倒していくのだった。
その中でだ。仮面ライダー龍騎になっている城戸がファイズに問うた。
「おい、乾無事か！」
「城戸さんか」
「ああ、無事か？」
「何とかな」
無事だとだ。乾も彼に応える。
「生きているさ」
「そうか、それは何よりだ」

「詳しい話は後になるな」
ここでだ。乾は。
右手をスナップさせてだ。それからだった。
再び剣を手にしてだ。女と対峙して告げた。
「御前が何者かはわからないがな」
「それでもだというのね」
「御前は敵だな」
「結果としてそうなるわね」
「それにスサノオがいるのなら」
女の後ろにだ。それならばだというのだ。
「倒す。詳しい話も聞いてやる」
「あの方と戦う為に」
「御前がそれを望むのならそうしてやる！」
こう叫んでだ。ファイズは。
順手に持ったその剣、赤い光を出すその剣を振るいだ。
女に突き進もうとする。その前にだ。
入力してだ。そのうえでだ。
その姿を赤く変えた。その姿になりだ。
女に進む。そのうえで言うのだった。
「これならだ」
「私に勝てるというのかしら」
「少なくとも負けるつもりはない」
それはないとだ。ファイズは女に返す。
「だから今この姿になったからな」
「ブラスターモードね」
女はファイズの今の姿を見てだ。こう言ったのだった。
「今の姿は」
「何っ、知っている！？」
「ファイズのブラスターモードを！？」
他のライダー達もだ。女の今の言葉にだ。

このことを察してだ。そうして言ったのだ。
「やっぱりスサノオからか」
「聞いていたんだな」
「そうよ。貴方達のことは全てね」
女は魔獣達と戦う龍騎とナイトにも話してきた。
「わかっているわ」
「仮面ライダーのこともか」
「全て」
「知っているわ。そしてね」
女はファイズと戦いながらだ。そのライダー達に話してきた。
「私とこれ以上戦いたければ」
「どうしろというんですか？」
仮面ライダーキバが女に尋ねた。

第一話　集うライダー達その九

「そうしたければ」
「私達の世界に来ることね」
悠然と笑ってだ。女はライダー達にこう告げてみせた。
「そちらにね」
「御前達の世界にか」
仮面ライダーイクサが女の言葉に対して返した。彼はライジングモードになりそのうえで魔獣達と戦っている。
「来いというのか」
「そうよ。来ることね」
悠然と笑ったままだ。女はライダー達にまた言う。
「そうすることね」
「それは誘いだな」
仮面ライダーサガ、登が言った。
「そう思っていいな」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。女も悪びれずに返す。
そのうえでだ。ファイズ達を見て言うのだった。
「さて、今から来るわね」
「その通りだ」
「ここで決めさせてもらう」
彼女の左右にそれぞれついたカイザとデルタが答える。
「この状況ならだ」
「倒せない筈がない」
「確かにね。このままだとね」
女も彼等を目だけで見回しながら返す。
「危ういわね」
「だから言ってるだろ」

ファイズがさらに攻撃を仕掛けながら女に言う。
「御前はここで倒す」
「敵は少しでも少ない方がいい」
「どうせ御前以外にもいるんだからな」
「話を聞きたいとは思わないのね」
女はファイズのその攻撃を己の剣で受け止めながら三人に返した。
既にjカイザとデルタも攻撃に入っている。今まさに三人の同時攻撃がはじまろうとしていた。
その中でだ。女は言うのだった。
「私達の世界のことを」
「生憎な。そんなつもりはないからな」
ファイズが女に対して返す。
「どうせこれ以上話すつもりはないんだろう」
「確かに。それはその通りよ」
「それに御前がこっちの世界に来られるんならな」
そこからだ。ファイズも察したのだ。
「俺達も御前の世界に来られるな」
「この魔獣達だったな」
「この連中のいる世界にも」
「その通りよ。貴方達仮面ライダーは」
女は平然としてだ。彼等に話してみせる。
「私達の世界にも来られるから」
「そういうことだな。それならな」
「ここでだ」
「倒させてもらう」
三人同時に言ってだ。そのうえでだ。
カイザがだ。二人に言った。
「あれで決めるぞ」
「あれでか」
「一気になんだな」

「この女にはあれしかないだろうからな」
それでだ。ファイズとデルタに話してだ。そうしてだった。
三人のライダー達は同時にだった。
それぞれのポインターでだ。ロックオンした。
赤、黄、そして青の三つの光の円錐が女に突き刺さる。それでだった。
三人同時に跳びだ。蹴りを浴びせにかかってきた。
「面白い攻撃ね」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおーーーーーーーーっ！！」
叫び声を挙げながらだ。攻撃を浴びせる。しかしだ。
女はそれを受けはしなかった。微笑んでからだ。
姿を消してしまった。後に残ったのは。
声だけだった。女の声が攻撃を空振りさせ空しく着地した三人に届いた。
「流石ね。それを受けたら私も危うかったわ」
「くっ、逃げたか」
「ええ、そうさせてもらったわ」
女の声が何とか体勢を立て直しながら歯噛みするカイザに応えてきた。

第一話　集うライダー達その十

「仮面ライダー、噂通りね」
「出て来い！」
デルタが顔をあげて女に叫ぶ。
「俺だってやられっぱなしじゃいられるか！」
「だから。今倒される訳にはいかないのよ」
女は姿を出さない。しかしだ。
それでも声だけがしてだ。ライダー達に対して言うのだった。
「どうしても私を倒したければ」
「そっちの世界に来い」
「そういう解釈でいいのかな」
「その通りよ。待っているわ」
楽しむ声でだ。女は告げてだ。
やがて気配も全て消えた。後に残っていたのは。
ライダー達だけだった。既にだ。
魔獣達も倒されるか消えていた。それを見てだ。
ファイズが最初に変身を解いた。そうして乾巧本来の姿になりだ。
そのうえでだ。同じく変身から戻っていた草加雅人、三原修二にだ。こう声をかけたのだった。
「あいつの世界に行くか？」
「そうだな。そうするか」
「向こうから言ってるんだしな」
草加と三原もだ。乾のその言葉に応える。
「今は行き方がわからないにしても」
「そうしてあいつを倒さないとな」
こうだ。二人が話しているとだ。
彼等の目の前にだ。白い小さな生き物が出て来た。
猫と兎を合わせた様な姿をしている。目が赤く耳は尻尾の様にな

っている。その謎の生きものが出て来てだ。彼等に言ってきたのだった。
「君達はあっちの世界よりこっちの世界に来て欲しいんだけれどね」
「何だ御前は」
「僕はキュウべえっていうんだ」
こうだ。この生きものは名乗ってきた。
「あの魔獣達がいる世界の者なんだよ」
「魔獣達の？」
既にライダーから戻っている紅がその言葉に問い返してきた。
「あの連中のことを知ってるんだ」
「うん、知ってるよ」
この生きものキュウべえは己の身体を猫の様に舐めながら紅の問いに答える。
「けれどあの女のことはあまり知らないよ」
「それでも魔獣達のことは知ってるんだよね」
「僕達の世界のことだからね」
だからだとだ。キュウべえはまた答えた。
「ずっと戦ってきてるしね」
「色々と聞きたいことがあるんだけれどな」
城戸もキュウべえに尋ねる。
「いいか？話を聞かせてもらってな」
「うん、その為にここに来たんだしね」
キュウべえは城戸の問いにまた答える。
「何でも聞いてよ。魔獣のことなら」
「それではだ」
ここまで話を聞いてだ。秋山も言った。
そのうえでだ。ライダー達は。
それぞれの仲間達に連絡をする。そうしてだった。
レストランアギトに集るのだった。それからだった。
白い店の中でだ。キュウべえの話を聞くのだった。

キュウベえはそれぞれの席に座る戦士達にだ。こう話すのだった。
「まずは僕達のことを話そうか」
「僕達？」
「僕達というのか？」
「うん、そうだよ」
まずはこうライダー達に話すのだった。
「僕達だよ」
「おかしい表現だな」
葦原涼がアギトの面々が座るテーブルにいるキュウべえに言い返した。
「あんたは見たところ一匹だが」
「それでも僕達なんだよ」
「あんた達は何匹もいるのか？」
「そうなんだ。僕達は固体はそれぞれだけれど一つの目的の為に動いてるから」
だからだというのだ。
「僕達なんだ」
「何かそうした話を聞くと」
葦原と同じ席にいる氷川誠も言う。

第一話　集うライダー達その十一

「君達って群生生物みたいなんだけれど」
「そう考えてもらっていいよ」
無表情そのものにだ。キュウべえは氷川の言葉にも応える。
「その通りだしね」
「何だよ、それ」
その話を聞いてだ。こう言ったのは。
剣崎一真だった。彼は仲間達と共に別の席にいる。
だがその席でこう言ってだ。首を傾げるのだった。
「頭の中身は同じなのか？」
「身体は違うけれどね」
その剣崎にも話すキュウべえだった。
「そうなってるんだよ」
「そうなのか」
「話わかってくれたんだね」
「大体だけれどな」
わかったと。剣崎も返す。
それを見てからだ。キュウべえはライダー達に話を再開した。
「それでだけれど」
「ああ、それでだよ」
「まずはあんたがどうやってここに来てるか」
「それを聞きたいんだけれどな」
「僕は門を通って来てるんだ」
そうして行き来しているとだ。キュウべえは話す。
「それぞれの世界の門をね」
「あれか」
今度言ったのは門矢士だった。
「それぞれのライダーに行き来していたあの様なものか」

「あれっ、僕達の世界だけじゃないんだ」
「あの女の世界も含めてだ」
門矢はキュウベえにこう話す。
「俺達はそれぞれの世界を行き来して戦ってきた」
「それなら話は早いよ。この門のことを知っているのはあちらの世界じゃ僕とあの魔獣達だけなんだ」
「それとスサノオだね」
野上良太郎がこう言う。
「スサノオが世界を通しているかどうかはわからないけれど」
「それは僕も知らないけれど」
キュウベえも知らないことがあるというのだ。
「とにかく門はね」
「それ何処にあるんだよ」
城戸が門の場所を尋ねる。
「それがわからないとどうしようもないだろ」
「門の場所はね」
それは何処にあるかというと。
「いつも急に出て来るから」
「門が出て来てか」
「その都度移動する？」
「それぞれの世界に」
「そうした理屈か」
「つまりあれだな」
ここまで話を聞いてだ。左翔太郎は自分の席で腕と脚を組んだ状態で話した。
「スサノオがその都度俺達をその世界に行かせるんだな」
「ふうん、スサノオってそういうことをするんだね」
キュウベえはこのことははじめて知ったという感じだった。
「それは知らなかったよ」
「あいつはそうした奴だ」

今言ったのは天道総司だった。
「俺達と戦い。色々と仕掛けてだ」
「そうして？」
「俺達がそれをどう防ぐのかを見て楽しみにしている」
「楽しみねえ」
キュウベえはそのことについてはだ。
首を傾げさせだ。無表情のまま話す。
「僕にはわからないね」
「楽しみがわからないのか」
「僕達には感情がないんだ」
そうだとだ。キュウベえは天道だけでなく他のライダー達にも話す。

第一話　集うライダー達その十二

「だから。そうしたことはわからないんだ」
「そうなのか」
「そうなんだ。それはわかっておいてね」
あらためて話すキュウベえだった。
「けれど少なくとも君達の敵じゃないし」
「隠していることはあるのかな」
今言ったのは草加だった。
「君はどうも何かを隠すタイプの様だが」
「隠せたら隠すけれど」
その場合はそうすると。このことは否定しないキュウベえだった。
だがそれでもだ。今はだというのだ。
「君達には隠せないみたいだね」
「隠してもすぐに見破ってみせるさ」
北岡秀一はこのことを堂々と告げた。
「伊達に敏腕弁護士をやってる訳じゃないからな」
「だよね。隠しても何にもならないし」
キュウベえは既にライダー達を見抜いていた。彼等は戦闘力だけでなく頭脳においてもかなりのものだということをだ。
「隠さないよ。僕の知ってる限りのことを話すよ」
「それでどうなっているんだ？」
響鬼もまたキュウベえに尋ねた。
「スサノオは色々な世界に介入しているみたいだけれどな」
「少なくとも僕の世界の魔獣はスサノオが後ろにいるんだ」
キュウベえはまずはこのことから響鬼に話す。
「それとあの女にもそうみたいだね」
「魔獣を操ってその世界のか」
「仮面ライダーに挑んでいる」

「そうなのか？」
「僕達の世界には仮面ライダーはいないよ」
それは否定するキュウべえだった。
「魔法少女はいるけれどね」
「魔法少女？」
「何だ、そりゃ」
「女の子が戦ってるのか？」
「僕達の世界ではそうだよ」
彼等の世界ではだ。そうだというのだ。
「仮面ライダーはいないけれど魔法少女が戦ってるんだ」
「あの魔獣達とか」
「そうしてるのか」
「そうだよ。それで君達が僕達の世界に来る時になったら」
その時こそはと。キュウべえは話す。
「門が開くから。それまでは待っていることだね」
「待つまでもないだろうな」
今言ったのは橘朔也だった。
「スサノオはいつもあちらから仕掛けて来る」
「そうですよね。あちらから来るからこそ」
「門もすぐにやって来る」
橘は剣崎にも話す。
「すぐにだ」
「じゃあその時にその世界に入って」
「あちらの世界のスサノオの企みを潰す」
橘は己の考えを淡々と話していく。
「そうするべきだ」
「ええ、それじゃあ」
「ううん、やっぱり仮面ライダーは頭がいいみたいだね」
キュウべえにもこのことはよくわかった。
「僕があれこれ言う必要はないみたいだね」

「あいつと戦いはじめてかなりになるからな」
秋山がそれが何故かを話す。
「そのやり方は知っている」
「だからなんだ」
「それに俺達が全員城戸みたいならだ」
何気に向かい側の席に座る城戸のことも話す。
「とっくに死んでいた」
「おい、俺が馬鹿だっていうのかよ」
「違うのか？」
「くそっ、こんな時でもそう言うのかよ」
「まあ。そっちの赤いライダーの人はね」
キュウベえは秋山に言われて少し怒った城戸を見て言った。

第一話　集うライダー達その十三

「直情的な性格みたいだけれど頭はそこまで悪くないと思うよ」
「あれっ、わかるのか？」
「うん。だって頭が悪いとそれこそすぐに死ぬからね」
だからわかるというのだ。
「ある程度の頭はあるよ」
「だよな。俺これでも大学だって出てるしな」
「とりあえず。僕の説明は不要な位皆頭はいいね」
「そうだよ。頭が悪いと今頃死んでたよ」
「じゃあ。まあ僕は暫くここの世界にいるから」
キュウベえは断る様にして話す。
「僕のわかる限りのことなら話すからね」
「わかった。ではまずはだ」
天道が言う。
「その開いた門に入るとしよう」
「それにしても何か大変なことになってきたな」
城戸は腕を組んでこう言った。
「スサノオが他の世界にもちょっかいかけてることはわかってたけれどな」
「それが仮面ライダーのいる世界にもだからな」
今言ったのは相川始だ。
「他の戦士達にもそうしていたとはな」
「全く。暇な奴だ」
秋山は表情を変えずにこう言った。
「何かとな」
「全くですよ」
良太郎は少しぼやいてる感じになっている。
「あちこちの世界に関わってるんですね。本当に」

「問題はどれだけの世界に関わっているかだね」
フィリップが考えるのはこのことだった。
「果たして幾つの世界に関わっているのか」
「多分関わっているのはあの二つの世界だけじゃない」
天道はこう見立てた。
「おそらく。俺達の今度の戦いはだ」
「それだけに長く激しいものになる」
「そういうことか」
「戦いははじまったばかりだな」
響鬼は少し気さくな感じで話した。
「じゃあ。気長にいくか」
「何か余裕だな」
「あれこれ深刻に考えても仕方ないさ」
その気さくな笑みでだ。響鬼は乾にも返した。
「戦うことは変わらないんだからな」
「それはその通りだな」
「だからな。油断は禁物だが気楽にいこう」
また言う響鬼だった。
「鍛えていってな」
「何か違うね」
キュウベえは響鬼の言葉を聞いてだ。
右の後ろ足で頭の後ろをかきながら言った。
「魔法少女達と」
「何が違うんだ？」
今問い返したのは小野寺ユウスケだった。
「俺達とその魔法少女の何処が」
「強いっていうかね。割り切ってるよね」
そこが違うというのだ。
「魔法少女達は諦めって言うかね。そういうのがあるんだけれどね」
「魔法少女がどういった存在かはまだよく知らない」

門矢はまずはこう言った。
「しかしだ。俺達はだ」
「仮面ライダーは？」
「ライダーになった理由は様々だ」
それこそ人それぞれだ。血の問題だったり運命的なものだったり自分で選んだりだ。だが共通しているものはあるのだった。
それは何か。門矢は話すのだった。
「だがライダーは何があろうと。例え死のうと」
「ああ、それは聞いてるよ」
キュウべえは門矢の今の言葉にすぐに言葉を入れた。
「君達は例え死んでも何度でも蘇るんだったね」
「そしてスサノオと戦う」
「それが君達の運命だったよね」
「俺達はその運命を受け入れている」
そうだというのだ。
「人間としてスサノオと戦う運命をだ」
「人間としてなんだね」
「そして人間だからだ」
「人間だから？」
「だからこそ仮面ライダーだ」
そうした意味もあるというのだ。
「だからだ。どの世界でも俺達はライダーとして人間としてだ」
「戦うんだね」
「そうさせてもらう」
こうした話をしてだ。彼等はだ。
戦いに向かうことをだ。キュウべえに告げたのだった。
仮面ライダー達の戦いがまたはじまった。それは彼等にとってこれまでの長い戦いに匹敵する激しい戦いになる。彼等もこのことを予感していた。

第一話　完

2011・8・13

第二話　にゃんぱいあその一

第二話　　にゃんぱいあ

ライダー達はあらゆる世界に赴きスサノオと戦う決意を固めた。
しかしだ。
そのそれぞれの世界への門はまだ開かれていなかった。そしてだ。
あの女も魔獣達も出て来なかった。この事態には。
彼等はだ。少し拍子抜けしたものを感じていた。
それは五代雄介も同じでだ。パートナーであり親友でもある一条薫にだ。こんなことを話していた。
「今のところは何よりですね」
「その魔獣達が出て来なくてか」
「ええ。平和が一番ですから」
屈託のない顔でだ。一条に話すのだった。
「何よりですよ」
「しかしだ」
それでもだとだ。一条はその屈託のない笑顔の五代に話す。
「安心はしていられない」
「はい、スサノオは絶対に仕掛けて来るからですね」
「話は聞いた」
その五代からだ。キュウベえの話を聞いたというのだ。
「そのキュウベえだな」
「本当の名前はインキュベイダーというらしいですね」
「仮面ライダーのいない世界でもスサノオは仕掛けてきている」
「そうです。人間に戦いを挑んでいるんです」
「あいつが他の世界にも仕掛けていることは知っていた」
ディケイドの頃にだ。それは判明していた。
しかしだ。この現実についてだ。一条は話すのだった。
「だが。仮面ライダーのいない世界にもか」

「スサノオは介入してきていたんですね」
「そうしていたとはな」
一条が言うのはこのことだった。真剣な面持ちで話す。
「それは考えていなかったな」
「そうですよね。仮面ライダー以外にもですか」
「人間ならばか」
一条はここでこう言った。
「仮面ライダーでなくとも挑んでいるのか」
「若しかしてスサノオは」
五代は笑顔から考える顔になってだ。一条にこう述べた。
「あれですかね」
「いえ、門矢君が人間ならって言ってまして」
そこからだ。考えての言葉だった。
「そこから思ったんですけれど」
「どうだというのだ？」
「人間であれば仕掛けてくるんじゃないでしょうか」
そうしているのではないかとだ。五代は言うのだった。
「それでなんじゃ」
「人間だからか」
「はい。仮面ライダーは人間ですよね」
「そうだ。人間だ」
このことはだ。一条も五代と長い間共に戦い生きてきて五代という人間を見てきてだ。このことがよくわかっていた。
「御前は姿が変わるがそれでも人間だ」
「そうですよね。ですから」
「仮面ライダーは人間だ」
このことはだ。一条は断言した。
「紛れもなく人間だ」
「その人間ならどんな戦士も仕掛けてくるんじゃないでしょうか」
「退屈を紛らわせる為」

これが大きかった。スサノオにとっては。
「そして人間という存在を見る為にだな」
「だから仕掛けているんじゃないでしょうか」
「そうだろうな」
五代の言葉にだ。一条も頷いた。
「言われてみればだ」
「そいう考えるのが妥当ですよね」
「スサノオはそうした存在だ」
一条もだ。スサノオについては熟知していた。長い戦いの中で。
「人を見たいのだ」
「あえて仕掛けてですか」
「最初は違っていたのだろう」
そしてこうも言うのだった。
「まだ。ショッカーの初期はな」
「あの頃はですか」
「おそらく真剣に世界征服を考えていた」
「その頃はですね」
「そうだ。しかしだ」
「それがどうして変わったんでしょうか」
「仮面ライダーと戦い」
そのショッカーはだ。ライダーと戦い続けていた。

第二話　にゃんぱいあその二

そしてだ。そこでだった。
「おそらく。時期的には仮面ライダーニ号が出て来てから」
「確かかなり最初ですよね」
「そうだったな。仮面ライダー一号が欧州に経ち」
ショッカーとの激戦の中で、である。
「仮面ライダー二号が日本に残ってから」
「あの頃にですか」
「スサノオの考えが変わった様だ」
その辺りからだというのだ。
「二人の仮面ライダーと戦い」
「そうして」
「仮面ライダー、ひいては人間を見ていてだ」
「世界征服の考えを変えたんですか」
「表向きは違っていた」
ショッカー、ひいてはバダンまでだ。その考えは同じだった。
「世界征服のままだった」
「けれどそれは」
「あくまで表向きだ」
それだけのことだったというのだ。
「それだけだった」
「では実は」
「仮面ライダーとの戦いを楽しむようになっていた」
そうなっていたとうのだ。スサノオは。
「その証拠に作戦もだ」
「戦いのそれがですか」
「世界征服の為の作戦ではなくなってきていた」
「ですね。言われてみれば」

五代もだ。一条のその話を聞いてだ。
考える顔になりだ。こう述べた。
「最初は世界征服の作戦ばかり立てていたのに」
「変わってきたな」
「ライダー打倒の。つまりは」
ライダー打倒は題目に過ぎない。では真の目的は。
「ライダーに罠や強敵をぶつけてですね」
「それをライダーがどう潜り抜けるか」
「それを見て楽しむ様になっていったんですね」
「それは御前もわかるな」
「はい」
一条の今の問いにだ。五代はそのライダーとしてだ。こくりと答えた。
そすいてだ。こうも言ったのだった。
「俺も。もうすぐで究極の闇になりましたし」
「一歩間違えれはな」
「グロンギ達との戦い自体が罠でしたから」
既にだ。五代も一条もこのことを把握していた。
それでだ。五代も今言うのである。
「クウガとして彼等と戦い」
「人間として戦い」
一条はクウガ、ひいては仮面ライダーを定義付けて話す。
「そしてだ」
「その戦いの中でグロンギになるのか」
「人間であり続けるのか」
「それを見ていたんですね」
「ン＝ダグバ＝ゼバはスサノオの分身の一つだった」
一条はまた指摘した。
「そのこともだ」
「はい、アークオルフェノクやワイルドジョーカー、キュリオスや

カイも」
彼等は全てだ。スサノオの分身だというのだ。
「全てスサノオだからだ」
「あいつはその都度俺達に仕掛けていたんですね」
「人間が自分の仕掛けた罠にどうするのか」
一条はまた話す。
「どう切り抜けるのかをだ」
「見る為に」
「仕掛けてきている」
「そしてそれは仮面ライダーに対してだけじゃなかったんですね」
「他の世界の戦士達」
まだ姿も名前も知らない。彼等もまた。
「彼等に対してもだ」
「あのキュウベえの話だと」
五代はここでキュウベえの話を思い出してだ。一条に話した。

第二話　にゃんぱいあその三

「あれですよね。魔法少女達が戦っているって」
「女の子もその対象の様だな」
「確かに女の子も戦いますけれど」
女の仮面ライダーもいる。ならば否定できないことだった。
「それでなんですね」
「そうだな。スサノオにとって性別は意味のないものか」
彼はあくまで人間を見ている。だからだというのだ。
「結局は」
「あくまで人間を見てですか」
「仕掛けてきているのだ」
「それで他の世界にも」
「仕掛け。そして見ている」
一条の言葉はシビアなものになってきていた。
「俺達をだ」
「人間そのものを」
「世界征服もおそらくは退屈を紛らわせる為だった」
「あの牢獄に囚われたままだから」
「あの牢獄はだ」
一条はスサノオが囚われている牢獄の話もした。
「そう出られるものではない」
「ツキヨミがその全てを賭けて築いたあれは」
「そうだ。出られはしない」
神であるスサノオを以てしうても。それは非常に困難であるのだ。
「だからこそ今もあの場所にいる」
「その中で何もすることができなくて」
「ああして仕掛けているのだ」
人間に対して。そうしているというのだ。

「それがスサノオだ。奴は飽きるまでそうするだろう」
「厄介な話ですね」
「厄介だ。だが」
「だが？」
「人間自体がそうなのだろう」
一条はさらに考える顔になり右手に手を当ててだ。
そうしてだ。こう五代に話したのだった。
「人間は常に試練が前にありだ」
「それを乗り越えるものなんですね」
「そうだ」
まさにだ。その通りだというのだ。
「だからだ。我々はだ」
「スサノオを憎んだら目が曇りますよね」
「スサノオの出して来る罠を乗り越えていく」
そうするというのだ。憎しみを抱かずだ。
「永遠にだ」
「仮面ライダーは死ぬことができませんし」
もっと具体的に言えば死のうが何度でも蘇る。黒衣の青年なりスマートレディがそうするのだ。そしてスサノオもライダー達が永遠に死ぬことは望んでいないのだ。
それがわかっているからだ。五代もだった。
前を向いてだ。一条に話した。
「俺、戦うことは嫌いです」
「それでもだな」
「はい、罠には打ち勝ちます」
そうするというのである。
「絶対に」
「そうだな。それではな」
「一条さんもですね」
「そうする」

これが一条の言葉だった。
「あの時と同じ様にな」
「すいません」
「何、いい」
戦うことはだ。いいと答える一条だった。
「あの時に全ては決まっていたからな」
「グロンギとの戦いの時にですか」
「そうだ。決まっていた」
彼にしてもだ。そうだというのだ。
「共に戦うのはな」
「けれど一条さんは」
「俺は人間だ」
仮面ライダーでなくともだ。それだというのだ。
「俺は人間だからな」
「それで、ですね」
「そうだ。戦う」
また答える一条だった。

第二話　にゃんぱいあその四

「仮面ライダーと共にな」
「そうしてくれるんですか」
「死ぬな」
今度はこう五代に告げた。
「いいな。絶対にな」
「わかってます。例え何度も生き返らなければならないにしても」
「死ぬな。俺も死なない」
「はい、俺は死にません」
「そうしてこの戦いも最後まで生きよう」
「そうしましょう」
こう二人で話してだ。戦いのことを誓い合うのだった。その二人のところにだ。
二本足で歩く黒猫が来た。それだけでも異様だが。
背中には蝙蝠の翼がある。その猫を見てだ。
五代がだ。最初にこう言った。
「ファンガイアですかね」
「そうかもな。若しくはあの一族か」
「そうした感じですよね」
最初彼等はこう考えたのだった。
「彼等との戦いは終わりましたけれど」
「では安心していいか」
「ですよね。特にね」
「警戒する必要はないか」
こう考えたのだった。しかしだ。
ここでだ。その一風変わった猫は。
五代の足下に来てだ。こう言ってきたのだ。
「血ィくれにゃ」

「血！？」
「そうだにゃ。血ィくれにゃ」
こう五代に言うのである。
「喉が渇いたにゃ。血が欲しいにゃ」
「血が欲しいってまさか」
「この猫は」
猫の言葉にだ。五代だけでなく一条もだ。
目を瞠ってだ。そして言うのだった。
「吸血鬼！？」
「バンパイアの猫か！？」
「んっ？僕を知ってるのかにゃ？」
その猫も猫でだ。こう彼等に返す。
そしてだ。こう名乗るのだった。
「僕はにゃんぱいあにゃ」
「にゃんぱいあ」
「それが君の名前か」
「そうだにゃ。とにかくにゃ」
ここでだ。その猫にゃんぱいあはさらに言うのだった。
「早く血を寄越すにゃ」
「血を」
「それを」
「どうします、それで」
「そうだな。血と言われても」
二人も咄嗟にはどうしていいかわからない。しかしだった。
たまたまだ。二人の目の前にだ。
漢方薬の店があった。その店を見てだ。
一条がだ。五代に対して言った。
「あの店がいい」
「あの店に入ってですね」
「血を貰おう」

店でだ。買うというのだ。
「漢方薬なら血もある筈だからな」
「それでなんですね」
「そうだ。血は」
「血なら何でもいいにゃ」
にゃんぱいあがまた五代の足下から言う。
「とりあえず喉が渇いたから欲しいんだにゃ」
「そうか、わかった」
一条もだ。にゃんぱいあの言葉を聞いてだ。
そのうえでだ。店に入りだ。
そうしてすっぽんの、ドリンク扱いになっている生き血を買ってにゃんぱいあに渡す。それを飲んでだ。
にゃんぱいあは満足した顔でだ。二人に言った。
「有り難うだにゃ。お陰で落ち着いたにゃ」
「それはよかったね」
「そうだな」
二人もまずそれはよしとした。

第二話　にゃんぱいあその五

だがだ。ここでだ。
二人はあらためてだ。にゃんぱいあに尋ねたのだった。
「君は一体何なのかな」
「何故猫なのに吸血鬼なのだ？」
「それで飼い主は」
「そうした人はいるのか」
「飼い主はいるにゃ」
それはいるとだ。にゃんぱいあは素直に答える。
「とても可愛い女の子にゃ。そこに弟と一緒にいるにゃ」
「成程。飼い猫か」
「それは間違いないか」
「あと血が好きなのは」
それはどうしてかとだ。にゃんぱいあはさらに話す。
「僕は最初普通の猫だったにゃ」
「普通のか」
「猫だったのか」
「子猫の頃は捨て猫で」
このことから話すのだった。
「それで死にそうな時に親切な人に助けてもらったにゃ」
「まさかその親切な人が」
「まさか」
「血を飲ませて助けてくれたにゃ」
話を聞くうちにいぶかしむ顔になる二人にだった。
にゃんぱいあはだ。さらに話してきた。
「それで今の僕がいるにゃ」
「吸血鬼の血を飲めば吸血鬼になる」
「それは猫もだったのか」

「とりあえず僕はそれで助かったにゃ」
にゃんぱいあはにこりと笑って話す。
「あの親切な人のお陰だにゃ」
「その吸血鬼が誰かはわからないけれど」
「それは」
「んっ、何かあるにゃ？」
「あるよ」
「おそらくはだが」
一条と五代はすぐににゃんぱいあに話した。そうしてだ。
二人は顔を見合わせだ。こう話し合うのだった。
「それじゃあまずは」
「皆に話を聞いてもらうか」
「はい、そうしてですね」
「このことについての話を聞こう」
こうしてなのだった。彼等は。
すぐに連絡がつく仲間達に連絡を取ってだ。集ってもらった。その場所は。
城南大学だった。その研究室にだ。
皆が集ってだ。そうしてだった。
「この猫が？」
「吸血鬼ですか」
「まさかと思いますけれど」
「確かに翼もありますし」
「普通の猫じゃないのは」
「すぐにわかりますね」
こう話していくのだった。そうしてだ。
椿秀一がだ。こんなことを一条に話した。
「この猫はな」
「何かわかったか？」
「確かに吸血鬼だ」

こう話すのである。
「それは間違いない」
「それはわかったのか」
「ただし生物学的にはだ」
その観点からはどうかというのだ。
「翼がある以外は他の猫と変わりがない」
「それは同じか」
「ああ、同じだ」
そうだというのだ。
「何処もおかしなところはない」
「じゃあ食べものは」
「何でも食べるにゃ」
机の上に二本足で立つにゃんぱいあが自ら言う。
「特に苺とか赤いものが大好きだにゃ」
「苺！？」
その言葉に目を顰めさせたのは沢渡桜子だった。

第二話　にゃんぱいあその六

それでだ。こうにゃんぱいあに尋ねたのだった。
「苺が好きなの」
「あとトマトも好きにゃ」
にゃんぱいあは実に楽しそうに桜子に話す。
「トマトをたっぷりと使ったナポリタンなんか最高だにゃ」
「ナポリタンって」
榎田ひかりもこれにはだった。
いぶかしむ顔になりだ。こんなことを言った。
「猫が食べるものかしら」
「そこがかなり変わっていますよね」
「本当に猫なのかどうか」
椿はこのことを指摘した。しかしだった。
それでもだ。こう言ったのだった。
「しかし調べた結果は」
「生物学的にはですか」
「そうだ。猫だ」
そうだとだ。彼は五代にも話した。
「間違いなく猫だ」
「血を吸わなくても生きていくことはできるにゃ」
またにゃんぱいあが自分のことを説明する。
「ただ。血を吸うと喉が渇かなくなるにゃ」
「お水は飲むの」
「勿論飲むにゃ」
またひかりの言葉にそうだと話す。
「けれど血は大好きにゃ。身体が自然と求めるにゃ」
「この辺りは確かに吸血鬼ですね」
「そうよね」

桜子とひかりもこのことは間違いないと言う。しかしだった。
それでもだ。彼女達から見てもなのだ。
「それでも生物学的には」
「猫だから」
「それなら猫だな」
一条はここでは生物学的な見解から判断して述べた。
「間違いなくな」
「そうですね。確かに食べものの好みは独特ですけれど」
五代もこのことには引っ掛かるものがあった。しかしだった。
それでもだ。生物学的にはだと聞いてだった。彼もこう判断するのだった。
「猫ですね」
「そうだな。猫だな」
「翼はありますけれど」
「しかし。この翼を使って」
一条は今度はにゃんぱいあの翼を見た。黒い蝙蝠の翼をだ。
その大きさを見てだ。彼は言うのだった。
「あまり飛ぶことはできそうにもないが」
「飛ぶことは好きでないにゃ」
にゃんぱいあ自身もそうだという。
「歩く方が好きだにゃ」
「やっぱり猫だな」
「確かにそうですね」
椿と五代がそんなにゃんぱいあの話を聞いてこのことを再確認した。
「間違いなくな」
「よく見たら仕草や行動も猫そのものですし」
「だとすると問題は」
「この子を吸血鬼にしたその吸血鬼が何者か」
「それが問題だな」

「そうなりますね」
こう話してだ。話の重点が移っていった。
そのだ。彼に血を与えた吸血鬼が誰か。五代が彼に尋ねた。
「あの、ちょっと教えてもらえるかな」
「何だにゃ？」
「君を吸血鬼にしたのは誰かな」
「あの時僕を助けてくれた人にゃ？」
「そう。それは誰かな」
「通りすがりの人だったにゃ」
これだけを聞くと門矢の様だ。しかしだった。

第二話　にゃんぱいあその七

そこからさらにだ。五代はにゃんぱいあに尋ねたのだった。
「外見は？」
「黒いタキシードにマントだったにゃ」
「それだけを聞くと」
「そうですね」
「標準的な吸血鬼に聞こえるわね」
椿に桜子、ひかりはだ。こう思った。
そしてだ。にゃんぱいあはさらに話すのだった。
「金髪に青白い肌に赤い目だったにゃ」
「完璧だな」
「ドラキュラ伯爵そのままですし」
「それならよね」
三人はここで確信したにゃんぱいあに血を与えたのは間違いなく吸血鬼だとだ。わかってはいたがこのことを再認識したのである。
しかしだ。それ以上にだった。彼等はだ。
その外見を全て聞いてだ。こうも話した。
「だが。そうした外見の吸血鬼は」
「そうですね。この世界には今はもう」
「いないか。休息に入っているか」
ファンガイアはいるがだ。そうした吸血鬼はというのだ。
いない。それならばだった。
「では別の世界の住人か」
「この子も含めて」
「あの謎の女や魔獣達と同じ様に」
それではないかというのだ。そう話してだった。
あらためてだ。彼等は。一つの結論を出したのだった。
「間違いなくだな」

「はい、この子もまたです」
「別の世界から来たわね」
「そうだな」
一条もだ。三人のその言葉に頷いた。
そのうえでだ。あらためてだった。彼は五代に話した。
「おそらく。このにゃんぱいあもだ」
「門を潜り抜けてこちらの世界に来ていて」
「あちらの世界にもスサノオがいる」
二つの事実がだ。確信されたのだ。
「間違いなくだ」
「そうなっていますね」
「ではだ」
「はい」
二人は頷き合い。そうしてだった。
そのうえでだ。あらためてにゃんぱいあに話した。
「一つ聞きたいのだが」
「ここにはどうして来たのかな」
「穴を通って来たにゃ」
そうしてこの世界に来たとだ。にゃんぱいあは二人の問いにこう答えた。
「そうしてここに来たにゃ」
「そうか。やはりな」
「そういうことでしたね」
「何か光っている不思議な穴だったにゃ」
にゃんぱいあはその穴についても話す。
「そこを通ったら何かここにいたにゃ」
「では間違いなくですね」
「そうだな」
また五代と一条が話す。
「にゃんぱいあも」

「スサノオが関係している」
「スサノオって何だにゃ」
だがにゃんぱいあはスサノオのことは知らないようだった。それが言葉に出ている。
「僕が知っているのは吸血鬼のお兄さんだけにゃ」
「ねえ、よかったら」
「君が通ってきたその光る穴に案内してくれるか」
五代と一条はにゃんぱいあに同時に頼み込んだ。
「そうしてくれるかな」
「よければ」
「わかったにゃ」
にゃんぱいあは快く笑って快諾した。
「じゃあ案内するにゃ」
「わかったよ。それじゃあ」
「同行させてもらおう」
こうしてだった。二人がだ。にゃんぱいあに同行してだ。
彼の後についていく。そうして来た場所は。

第二話　にゃんぱいあその八

ごく普通の公園だった。そこに来てだ。
一条が公園の中を見回しながら言う。
「ここは」
「普通の公園ですよね」
「そうだな。どう見てもな」
こう五代にも返す。ジャングルジムにすべり台にブランコがある子供用の公園だ。本当に何のおかしなところもない普通の公園だ。
その公園の中を見回してだ。一条は言うのだった。
「ここに何があるとは」
「思えませんね」
「グリードが出るなら不思議ではないが」
「そんな気配はないですし」
「グリード？何だにゃそれは」
にゃんぱいあは二人の前にいる。その彼がだ。
二人の方を振り向いてだ。こう尋ねてきた。
「お菓子だにゃ？それなら苺があると最高だにゃ」
「まあお菓子じゃないから」
「そういうものではない」
「じゃあどうでもいいにゃ」
お菓子でなければだ。どうでもいいと言ってだ。
にゃんぱいあは土管を寝かせて土を持ったそこに向かう。それを見てだ。
一条がだ。また五代に話した。
「あそこだな」
「あそこに入ってですね」
「彼等の世界に入るか」
「そこに」

「では行こう」
一条は決意と共に言った。
「そしてあちらの世界でもだ」
「スサノオと」
「ついて来るにゃ」
土管の入り口でだ。にゃんぱいあは二人にまた声をかけた。
「あの穴を潜ったら僕の世界だにゃ」
「うん、じゃあ」
「行くか」
こうしてだった。二人は身体を屈め膝を折ってだ。
そのうえで土管の中に入る。すると光に包まれ。
土管を潜り終えると。そこは。
何もおかしなところのない世界だった。ただ出て来たのは川辺だ。
川辺に転がっている土管を潜り抜けてだ。出て来たのである。
右手に青い静かな川が。左手には緑の土手がある。草の中に赤や白の小さな花が見える。
「さあ、ここにゃ」
「ここか」
「そうだにゃ。ここだにゃ」
にゃんぱいあの言葉に応えてからだ。一条はその周りの川や土手を見回したのだった。無論ささやかに咲いている花達もである。
そうしたものを見てだ。一条がまず言った。
「何の代わりもないな」
「ですよね。平和そうです」
「んっ？ここは平和だにゃ」
また二人に顔を向けて話すにゃんぱいあだった。
「そっちでは違うにゃ？」
「そうだね。色々といるからね」
「御世辞にも平和とは言い難いな」
仮面ライダー、その協力者としてだ。二人は答えた。

「さっき言った様なグリードもいるし」
「騒がしい世界だ」
「とりあえず平和ではないんだにゃ」
二人の話を聞いてだ。にゃんぱいあは。
困った顔になってだ。それで言うのだった。
「そうした世界には困ったものだにゃ」
「つまりこの世界は平和で」
「グリードやそうした存在はいないか」
「だからグリードはお菓子でないなら何にゃ？」
にゃんぱいあの関心はそちらにあった。
「よくわからないが美味しそうな名前だにゃ」
「ううん、美味しそうかな」
「特にそうは思わないが」
「とにかくだにゃ。僕は今から家に帰るにゃ」
そうするというのだ。
「一緒に来るにゃ？」
「どうする？」
にゃんぱいあの言葉を受けてだ。一条は。
五代に顔を向けて。それで尋ねたのだった。
「行ってみるか」
「ええと。猫の家ですよね」
「飼い主がいるらしい」
一条はこう考えて話す。

第二話　にゃんぱいあその九

「どうやらな」
「飼い主がいるんですか」
「そんな感じがする」
これは一条の勘から言うことだ。彼の戦いで培い、そして刑事という職業、その二つから身に着けた勘からの言葉である。
それを言ってだ。彼はあらためて五代に話した。
「だからだ。言ってみよう」
「その飼い主の人から手掛かりをですね」
「この世界の手掛かりも手に入るだろう」
「ですね。それじゃあ」
「まずは言ってみることだ」
「わかりました」
五代も一条の言葉に頷き。そうしてだった。
二人でにゃんぱいあに案内され彼の家に向かった。そこは。
白い家だった。人間のごく有り触れた家だ。その家の前に来てだ。
今度は五代がだ。一条に問い返した。
「あの、何ていいますか」
「同じだな」
「ですよね。この家は」
「普通の家だ」
一条もだ。その家を見ながら言う。
「どう見てもな」
「けれどまさか」
「中は違うか」
「その可能性もやはり」
あるのではと。五代は本来は一条が言うことを話した。
「あるのでは」

「では気をつけてか」
「行きましょう」
「帰ったにゃ」
にゃんぱいあは家の玄関の前でにこりと笑って言った。
「誰かいるにゃ？いたら出て欲しいにゃ」
「あっ、にゃんぱいあ？」
その言葉に応えてだった。家の扉が開いてだ。
そこからごく普通の女の子が出て来た。そうしてだ。
そのうえでだ。にゃんぱいあと五代達を見て言うのだった。
「お客さんなの？」
「そうだにゃ。僕の友達にゃ」
何時の間にかそうなっていた。
「だからお家の中に一緒に入れて欲しいにゃ」
「大人の人ね」
「仕事は刑事だ」
まずは一条がだ。警察手帳を出して話した。
「これでわかってくれたか」
「刑事さんがですか」
「僕の友達だにゃ」
にゃんぱいあがまた言うとだった。女の子は。
首を捻ってだ。にゃんぱいあに問い返した。
「何か悪いことしたの？」
「えっ、何でそう言うにゃ！？」
「だって。刑事さんよ」
女の子はこのことを根拠にして言うのだった。
「悪いことしないとお家に来ないじゃない」
「僕何もしてないにゃ」
「けれど実際に来てるし」
「だからしてないにゃ」
「そうなの？」

「大体猫が人間のお巡さんに捕まる筈がないにゃ」
にゃんぱいあはここで根本的な真理を言ってみせた。
「僕は猫にゃ」
「そういえばそうね」
女の子もだ。ここでようやくだった。
にゃんぱいあの言葉に納得してだ。それからだ。
五代と一条にだ。こう尋ねるのだった。
「じゃあにゃんぱいあのお友達なんですね」
「はい、そうです」
「確かに刑事だが事件に来た訳ではない」
一条はその事情を説明した。

第二話　にゃんぱいあその十

「それは保障する」
「そうですか。ではどうぞ」
あらためてだ。二人に家に入るように話したのだった。
そしてだ。そのうえでだった。二人に自分の名を名乗った。
「美咲です」
「美咲ちゃんですか」
「それが君の名前か」
「はい。宜しく御願いします」
「僕の飼い主だにゃ」
にゃんぱいあはここでこのことも二人にまた話した。
「とても奇麗な娘だにゃ」
「奇麗なのはいいけれど」
それでもだとだ。美咲はにゃんぱいあを抱き抱えてから。
そのうえでだ。二人を家の中に案内したのだった。
二人は家の応接間に案内された。そうしてだ。
「はい、どうぞ」
「あっ、どうも」
「済まない」
二人にだ。苺が出される。にゃんぱいあにもだ。
その苺をだ。出した後でだ。美咲はにゃんぱいあに話した。
「じゃあ後はどうするの？」
「僕がお話するにゃ」
「にゃんぱいあが？」
「そうだにゃ。だからもう美咲ちゃんはゆっくりとしていいにゃ」
「わかったわ。それじゃあね」
美咲はにゃんぱいあの言葉に頷いてだ。そのうえでだ。
二人とにゃんぱいあを残して部屋を出た。こうしてだ。

二人はにゃんぱいあと対した。まずはだ。
五代がだ。苺を食べながら自分の向かいの席で自分と同じく苺にかぶりつき幸せな顔をしているにゃんぱいあに尋ねたのだった。
「いいかな」
「何だにゃ？」
「その吸血鬼の居場所はわかるかな」
尋ねたのはこのことだった。
「それはどうかな」
「ううん、実はにゃ」
「実は？」
「どう何処に行ったのか」
困った顔になって前足を組んで。にゃんぱいあは五代の今の問いに答えた。
「僕も知らないにゃ」
「えっ、知らないの」
「そうなのか」
「神出鬼没の人だにゃ」
だからだというのだ。
「そう簡単に見つかりはしないにゃ」
「ではだ」
にゃんぱいあが吸血鬼の居場所を知らないと言われてだ。今度は。
一条が出て来てだ。そうして彼に尋ねたのだった。
「手懸かりだが」
「手懸かり？」
「それはあるだろうか。または証拠は」
「そう言われてもにゃ」
にゃんぱいあは困った顔になり一条の言葉に応える。
「思い出せないにゃ」
「そうなのか」
「悪いけれどそうだにゃ」

こう二人に話すのである。
「さっき言った通りにゃ」
「手懸かりもなしか」
一条は腕を組みだ。困惑した顔を見せた。
そしてだ。五代にこう言うのだった。
「こうなれだ」
「俺達だけで、ですね」
「そうだ。手懸かりを探そう」
「そうしましょう」
こうした話をしてだった。二人は。
この世界の町を見回り手懸かりを探そうと決意した。その二人にだ。

第二話　にゃんぱいあその十一

にゃんぱいあがだ。こう言ってきたのだった。
「それならにゃ」
「君も？」
「ついて来てくれるのか」
「この町のことはよく知ってるにゃ」
だからだというのだ。
「それでにゃ。ついて来るにゃ」
「うん、それじゃあ」
「共に行こう」
こうしてだ。二人はにゃんぱいあも連れてだった。
そのうえで家を出てだ。それからだった。
町に出て手懸かりを探しはじめた。その彼等の前にだ。
頭に茶色い部分のない、頭が真っ白のシャム猫の子猫が来た。背中にはリボンがある。
その子猫がだ。にゃんぱいあを見てだ。自分の方から声をかけてきた。
「あっ、兄上」
「んっ、茶々丸だにゃ」
「何処に行かれるのですか？」
こうにゃんぱいあに対して尋ねてきた。
「今から一体
「少しだにゃ」
「少しですか」
「スサノオという奴、もしくは吸血鬼の手懸かりを探すにゃ」
「スサノオはわからないですが」
茶々丸と呼ばれたにゃんぱいあを兄と呼ぶ猫はここで言うのだった。

「吸血鬼さんですね」
「そうだにゃ。あの人だにゃ」
「兄上から外見は前に御聞きしていますが」
こう前置きしれから話す茶々丸だった。
「何日か前に見ましたが」
「えっ、見たって」
「その吸血鬼をか」
「はい」
その通りだとだ。茶々丸は二人に返した。
「何か猫を一杯連れていましたよ」
「その人だにゃ」
ここでまた言うにゃんぱいあだった。
「その人が吸血鬼だにゃ」
「猫を一杯連れている」
「わかりやすいな」
五代と一条も言う。
「それなら今から」
「探すか」
「そうしましょう」
こうした話をしてだった。二人はにゃんぱいあと茶々丸の協力を得てだ。
この世界を調べて回ることにした。しかしだ。
ふとだ。一条がにゃんぱいあと茶々丸に尋ねたのだった。
「今思ったのだが」
「何にゃ？」
「どうかしたのですか？」
「あの娘だが」
こうだ。美咲のことに言及したのである。
「君達、特ににゃんぱいあのことだが」
「僕がどうかしたかにゃ」

「君を見ても何とも思っていなかったか」
このことにだ。今気付いたのである。
「吸血鬼である君を見てもだ」
「それがどうかしたにゃ？」
「だからだ。吸血鬼というものはだ」
彼が話すのはこのことだった。
「そう簡単に受け入れられる存在ではないのだ」
「そうなのにゃ？」
「血を吸うのだぞ」
一条が話すのは吸血鬼のその性質のことだ。
「それでどうして簡単に受け入れられるのだ」
「僕そんなにまずかにゃ？」
「僕にもわからないです」
茶々丸は首を捻るにゃんぱいあにこう返した。
「けれどそうみたいですね」
「どういうことかわからないにゃ」
「若しかしてあの美咲という娘は」
「かなりの娘かも知れませんね」
五代もだ。腕を組んで言った。
「この子を普通に受け入れているんですから」
「例え吸血鬼であってもその本質を見る」
「そうした娘かも知れませんね」
「だとすれば」
どうなのかとだ。一条はさらに言った。
「この世界にはあの娘以外にもこの子達を受け入れている人間がいるのか」
「問題はそこにあるかも知れませんね」
何となくだ。二人もこのことがわかってきたのだった。そうしてだった。
彼等はあらためてこの世界を回りだ。手懸りを探していくのだっ

た。

第二話　完

2011・8・20

第三話　受け入れる器その一

第三話　　受け入れる器

五代と一条はにゃんぱいあ、茶々丸の案内を受けてだ。彼等の世界を回った。そうしてだ。

まただ。変わった猫に会ったのだった。

右目に眼帯をし三日月の兜を被った白猫に会ったのだ。その猫を見てだ。

五代と一条はだ。それぞれ言うのだった。

「まさかこれは」

「そうだな。どう見てもな」

「戦国大名のあの」

「伊達政宗か」

「んっ、俺のことを知ってるのか？」

実際にだ。この猫、この猫もまた二本足で立っている。この猫が二人を見上げてだ。自分からこんなことを彼等に対して言って来たのだった。

「俺は独眼竜まさむにゃだ」

「やっぱりそうか」

「あの大名にちなんでいるのか」

「あの人は人間だが尊敬しているぜ」

自分でこう言うまさむにゃだった。

「凄い人だったよな」

「うん、確かに」

「そして君はか」

「あの人にちなんでこの格好をしているんだよ」

「まさむにゃはいい奴にゃ」

にゃんぱいあがにこりと笑って二人に話してきた。

「僕の友達にゃ」

「あ、ああ」
にゃんぱいあにそう言われてだ。まさむにゃは。
何処か恥ずかしそうな顔になってだ。こう言うのだった。
「そうだな。俺達は友達だにゃ」
「そうだにゃ。いつも仲良しだにゃ」
「成程。君達は友達なんだ」
「ではこの猫も」
「ああ、俺は吸血鬼じゃないからな」
二人が何を言うのか察してだ。まさむにゃから言ってきた。
「普通の猫だぜ」
「ううん、あまりそうは見えないけれど」
「そうなのか」
「そうだよ。何処がおかしいんだよ」
自分では自覚がないといった口調である。
「俺は別に血を吸わないしちゃんと飼い主もいるしな」
「君もそこはにゃんぱいあと同じなんだね」
「飼い猫だったのか」
「そうだよ」
こう答えるまさむにゃだった。
「立派な飼い主だぜ」
「そうですね。あの子もいい子ですね」
茶々丸もここで言う。
「僕達の飼い主の美咲ちゃんと同じで」
「美咲ちゃんは時々血を吸わせてくれるにゃ」
にゃんぱいあはここでもにこにことして話す。
「とても優しくていい御主人様だにゃ」
「やっぱりあの娘は」
「かなりの娘だな」
五代と一条は今の話からもだ。美咲の器をあらためて認識した。
そのうえでだ。彼等は。

まさむにゃにだ。さらに尋ねるのだった。
「君の他にもそうした猫はいるのかな」
「この辺りにいるか」
「いるっていったらいるな」
まさむにゃは急にだ。顔を曇らせてだ。
そのうえでだ。二人にこう話したのだった。
「けれど俺は好きにはなれないな」
「好きになれない」
「どういった猫なのだ」
「性格がな。悪いんだよ」
それでだ。好きになれないとだ。まさむにゃは二人にまた話した。
「だからな。ちょっとな」
「そうなんだ。だからなんだ」
「その猫には会いたくないか」
「けれどまあいいぜ」
まさむにゃは二人にだ。今度はこう告げた。
「案内してやるよ、そいつの場所に」
「うん、御願いするにゃ」
にゃんぱいあがまたまさむにゃに話す。

第三話　受け入れる器その二

「にゃてんしのところに行くにゃ」
「さて、あの人は何をしているのでしょう」
茶々丸もここで言う。
「また悪戯をしているのでしょうか」
「だよな。この前なんてな」
「そうそう、毛虫をです」
茶々丸はまさむにゃと話をしていく。
「女の子に見せて怖がるのを見て喜んでましたから」
「性格悪いよな」
「はっきり言って悪いですね」
茶々丸の言葉には何の容赦も見られない。
「意地悪です」
「だから好きになれないんだよ」
「何か今度の猫は」
「悪戯者か」
一条と五代も彼等の話からこう考えた。
「だとすると少し」
「厄介なことになるか」
だが、だ。それでもだった。五代はこの心配はしていなかった。
「しかしそれでもですね」
「そうだな。クウガに変身する必要はなさそうだな」
その懸念はなかった。この世界は平和な中にあるからだ。
それでだ。今はだった。
「このまま戦いとは別の」
「調査が続くな」
「そうですね。それにしても」
五代はだ。ここでだった。

まさむにゃをあらためて見てだ。こんなことを言った。
「それにしても君は」
「何だ？まだ何かあるのか？」
「甲冑というか鎧まで着てるんだね」
五代が今言うのはこのことだった。
「また本格的だね」
「ああ、鎧か」
「兜だけでも凄いのに」
「俺は徹底的に凝る主義なんだよ」
それでだ。この格好だというまさむにゃだった。
彼は胸を張ってだ。五代にさらに話す。
「だから鎧だってな」
「そういうことだな」
「格好いいだろ」
「確かに。けれど猫がここまで人間的な世界なんて」
「あるとは思わなかったな」
「そしてそのことをこの世界の人達は受け入れて」
そのことにだ。五代だけでなく一条もだ。
考えるものがありだ。実際に言葉に出していくのだ。
「彼等と共存しているんですね」
「スサノオはこの世界で何を仕掛けている？」
一条はこのことについても考えを及ばせた。
「一体だ」
「スサノオはいつも人間を見ていますけれど」
「この世界では何を見ている？」
「そこに何かがありますね」
「間違いなくな」
そうした話をしていってだ。彼等は。
にゃんぱいあだけでなくまさむにゃ、そして茶々丸も加えてだ。
そのうえでだ。

そのにゃてんしのところに来た。見れば。
黒い翼、鳥のそれを背中に生やしている白猫がいた。その猫がだ。
耳が灰色の白猫にだ。棒に糸で括っている毛虫を見せてだ。
そうしてだ。こんなことを言っていた。
「どうですか？」
「ちょ、ちょっと」
「毛虫は嫌いですか？」
「僕そういう虫は苦手なんだよ」
その白猫は泣きそうな顔になり彼に言う。
「だから近寄らせないでよ」
「駄目ですよ。こんなものを怖がっていてはですね」
「けれどどうしても」
「ほらほら、怖がらない怖がらない」
こうしてだ。意地悪をしていた。その黒い翼の白猫をだ。

第三話　受け入れる器その三

まさむにゃがだ。右の前足で指し示しながら五代と一条に話した。
「そのにゃてんし？」
「あの黒い翼の猫がか」
「そうだよ。やっぱり悪いことしてるな」
「ううん、何か意地悪をしているな」
「その様だな」
このことは二人もすぐにわかった。そうしてだ。
あらためてだ。まさむにゃに尋ねるのだった。
「見れば頭に天使の輪があるね」
「黄金に輝いているが」
「あれかよ」
「あれを見る限りあの猫は天使かな」
「だが翼が黒いな」
二人はこのことにもすぐに気付いてだ。まさむにゃに話す。
「堕天使なのかな」
「本来の天使なら翼が白い筈だな」
「そういえばそんなことを言っていたにゃ」
ここでにゃんぱいあが二人に話した。
「にゃてんしは悪いことをし過ぎて天界を追い出されたにゃ」
「それで天界に何かしようと企んでいるらしいな」
まさむにゃも言う。
「だからあいつはなあ」
「困った方ですね」
茶々丸もここで言う。
「ああしてすぐに悪戯をされますし」
「嘘も吐くしな」
まさむにゃは顔をやや顰めさせて話す。

「だから俺はあいつは好きになれないんだよ」
「そうかにゃ。そこまで徹底的に悪くはないにゃ」
「そうか？結構意地悪いぜ」
「ううん、あの猫は」
五代は彼等の話を聞きながらこう述べた。
「確かに性格はよくないね」
「そうだな。しかし根は極端に悪くはないようだ」
一条はこのことも見抜いた。五代もそうであるが。
「少なくとも人や猫を徹底的に害したり殺したりはしないな」
「そういうことは絶対にしませんね」
「少しあの猫ともな」
「話しますか」
二人が言っているとだ。そこにだ。
そのにゃてんしがひょっこりと来てだ。こんなことを言ってきたのだった。
「僕に何か御用ですか？」
「あっ、今声をかけようと思っていたけれど」
「気付いたのか」
「はい」
その通りだとだ。にゃてんしも答える。
そしてだ。二人を見てだ。こんなことを言った。
「この町の方ではないですね」
「そうだにゃ。この人達はにゃ」
二人に代わってにゃんぱいあがにゃてんしに説明する。
「僕が遊びに行った世界にいる人達だにゃ」
「ほう、別の世界から来られた方々ですか」
「そうだにゃ」
こうにゃてんしに説明するのである。
「とてもいい人達にだ」
「そうですね。ただ」

「ただ。何にゃ？」
「どうも僕の遊びには乗ってくれそうもないですね」
とりわけ一条を見てだ。にゃてんしはすぐにこのことを見抜いたのだ。
「残念ですが」
「少なくともだ」
一条が真面目な顔でそのにゃてんしに答える。
「我々は君の悪戯にどうこうされることはない」
「そういうことは子供の頃にやったりやられたりだからね」
五代もその人生経験から話す。
「だからそういうことにはね」
「どうこうされることはない」
「それは残念です」
こうは言うがだった。にゃてんしは。

第三話　受け入れる器その四

特に表情に出すこともなくだ。こう言っただけだった。
「では貴方達には何もしません」
「しても何もないから」
「それでなのか」
「その通りです。それではですが」
「それでは？」
「我々への質問だな」
「そうです。見たところ貴方は」
にゃてんしはここで五代をまじまじと見た。それからだ。
こうだ。彼に尋ねたのだった。
「只の人ではありませんね」
「それはわかるんだね」
「はい。伊達に天使だった訳ではないですから」
その力からだ。五代のことがわかるというのだ。
「一体どういう方なのでしょうか」
「仮面ライダーと言おうか」
五代は真面目な顔になってだ。にゃてんしに答えた。
「このことはにゃんぱいあ君は知っていると思うけれど」
「そういえば聞いたにゃ」
あちらの世界に来た時のことを思い出してだ。にゃんぱいあも応える。
「何か色々な連中と戦っている人達らしいにゃ」
「そうなるね」
五代もそのことを認めた。
それでだ。彼等にこう話したのだった。
「俺達は」
「俺は変身はしないが」

一条も言う。それでも同じだというのだ。
「それでもだ」
「色々な奴等と戦ってきているんだ」
「だがそれでもだ」
「戦っている相手は同じだよ」
こうも言ったのだった。
「それはね」
「あれ？何かおかしいにゃ」
にゃんぱいあもその言葉に対して言う。
「色々な奴と戦っていると言ったにゃ」
「そうですね。それで同じというのは」
茶々丸もこのことを指摘する。
「妙な感じがしますけれど」
「そのことだが」
一条が彼等のその疑問に答える。
「つまりだ。色々な敵を出している黒幕がいる」
「ああ、そういうことですか」
その話を聞いて最初に理解したのはにゃてんしだった。
それでだ。一条に対してこう尋ねた。
「犬やら猫の後ろに人間がいたりするというのと同じですね」
「そうだな。簡単に言えばそうなる」
一条もにゃてんしのその話で大体いいとした。
「そしてその黒幕だが」
「何ていうんだよ」
「スサノオという」
一条は今度はまさむにゃに話した。
「神と言えば聞こえがいいがかなり癖の悪い神だ」
「神は大体そういうものですよ」
にゃてんしは一条の今の言葉にすぐにこう言ってきた。
「傲慢で身勝手なものです」

「そうかも知れない。しかしだ」
一条はにゃてんしの言葉に頷きながらさらに話す。
「スサノオは少し違っている」
「俺達と戦い。罠を仕掛けて」
五代がだ。仮面ライダークウガである彼が詳しく説明する。

第三話　受け入れる器その五

「そうしたことで人間を試して見ているんだ」
「どうしてそんなことをするにゃ？」
「退屈を紛らわさせる為にね」
「それでそこまで回りくどいことをするにゃ」
「そうなんだ。どうやらこの世界にも」
一条はここでだ。遂にだった。
スサノオの存在をだ。彼等に話すのだった。
「スサノオは関わっているから」
「我々はそのスサノオを探しているのだ」
一条もそうだというのだ。
「何処にいるのかをだ」
「何処かっていってもな」
「そのスサノオがどういう姿をしているのか」
「それもわからないのですけれど」
まさむにゃに茶々丸、にゃてんしがそれぞれそのスサノオについてだ。五代と一条に対して突っ込みを入れた。そうしてきたのだ。
それに対してだ。二人はこう話した。
「姿は色々あるんだ」
「その都度変えてくる」
つまりだ。姿ははっきりしないというのだ。
「俺達の前に現われる度に姿を変えているから」
「それははっきりと言えない」
「それじゃあ絶対にわからないにゃ」
にゃんぱいあは二人の話を聞くとだ。
すぐに困った顔になって返した。
「姿がわからないのなら」
「はい、お話になりません」

茶々丸は兄よりも手厳しかった、可愛い顔をしてぴしゃりと返す。
「それでどう調べろというのでしょう」
「手懸りはあるよ」
すぐにだ。五代がこう告げる。
「それが吸血鬼なんだよ」
「僕を助けてくれたあの人にゃ」
「その人が何処にいるのか知りたいんだ」
そこにあるとだ。五代は話す。
「教えてくれたら有り難いけれど」
「知っているのなら」
「ああ、それでしたら」
すぐにだ。にゃてんしが答えてきた。
「面白い方々がおられますよ」
「吸血鬼の行方を知っている？」
「そうした相手なのか」
「はい、おそらくは」
にゃてんしは二人に話していく。
「ですから。その方々に御会いしてはどうでしょうか」
「それ本当か？」
まさむにゃは幾分疑う顔でにゃてんしに対して問い返した。
「本当に知ってるんだな」
「本当ですよ。この人達には見破られますから」
見破られるとわかってだ。にゃてんしも何かをすることはしないというのだ。
それでだ。二人には嘘を吐かないというのだ。
「ですから本当ですから」
「それじゃあ一体」
「どういう相手なのだ？」
「やっぱり猫ですかね」
「そうだろうな」

五代と一条は最初はこう考えた。しかしだ。
ここでだ。にゃてんしは二人に言ったのだった。
「いえ、蝙蝠ですよ」
「蝙蝠！？」
「今度は蝙蝠なのか」
「はい、蝙蝠です」
そのだ。蝙蝠だというのだ。
「蝙蝠の方々です」
「蝙蝠、吸血鬼には相応しいですね」
「まさに象徴だな」
五代と一条はにゃてんしからの話を聞いて話し合う。
「じゃあその蝙蝠達なら」
「吸血鬼の行方を知っているな」
「ならすぐにですね」
「その蝙蝠達の行方を探そう」
こう言うとだった。すぐにだった。
二匹の蝙蝠達が来た。どちらも頭と翼だけの姿だ。一匹の耳と足がピンク色でもう一匹のそれは黄色だ。その蝙蝠達が来てだ。

第三話　受け入れる器その六

五代の両肩にそれぞれ止まりだ。服の上から吸いはじめた。
そしてだ。こう言うのだった。
「何か違うね」
「そうだね」
「普通の人間の血じゃないような」
「ちょっと味が違うね」
「しかもこの人あまり痛がらないし」
「おかしいね」
その彼等を見てだ。すぐにだ。
五代は血を吸われたままだ。にゃんぱいあに尋ねた。
「若しかしてこの蝙蝠達が？」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。にゃてんしも答える。
「その方々です」
「そうか、やっぱりね」
「あの、痛くないんですか？」
カツオを少しオドオドとした感じで五代に尋ねる。
「血を吸われて」
「まあこれ位だとね」
何でもないとだ。五代は返す。
「俺は別に何ともないから」
「そうなんですか」
「これまでの戦いで何度も死に掛けているしね」
「それと比べればですか」
「そう。何ともないよ」
こうカツオに答える五代だった。
「特にね。けれどだよ」

「けれど？」
「この蝙蝠達は知ってるんだよね」
まだ自分の血を吸っている蝙蝠達を横目で見ながらだ。五代はカツオに尋ねた。
「吸血鬼の居場所よ」
「そうみたいですね」
「なら話は早いよ」
それならというのだ。
「彼等に聞くから」
「ちょっと待ってね」
「吸い終わってからね」
蝙蝠達も応えてきた。
「お話していいかな」
「吸血鬼さんのことは」
「うん、いいよ」
五代もだ。気軽に返す。
「それじゃあそういうことでね」
「何かこうして気軽に血を吸わせてくれるし」
「お兄さんいい人だから気に入ったよ」
こうしただ。のどかな会話をしつつだ。蝙蝠達は五代の血を楽しんだ。にゃんぱいあも彼の足にかぶりついてだ。血を吸った。
それからだ。血を満腹になるまで吸った蝙蝠達はだ。五代と一条に言ってきた。
宙をぱたぱたと舞いながらだ。そのうえで話すのだった。
「まずは僕達の名前ね」
「それ言うね」
「そうだね。まずはお互いに名乗って」
「それからだな」
こう言葉を交えさせてだった。それぞれだった。
まずはピンクの蝙蝠と五代が名乗った。

「毛利っていうんだ」
「五代祐介。宜しくね」
続いてだ。黄色の蝙蝠と一条だった。
「小森だよ」
「一条薫。覚えていてもらおう」
「二人共別の世界から来た人にゃ」
にゃんぱいあは蝙蝠達にこのことを付け足した。
「宜しくにゃ」
「へえ、他の世界からなんだ」
「こっちの世界に来たんだ」
「うん、そうなんだ」
「縁があって行き来することになる」
二人は二匹の蝙蝠達にも自分達のことを話した。
「もっと言えば俺はさ」
「五代さんだったっけ」
「何なの？」
「仮面ライダーなんだ」
このこともだ。五代は話した。

第三話　受け入れる器その七

「バイクに乗って戦う仮面の戦士なんだ」
「そうにゃ。何かとても強いらしいにゃ」
またにゃんぱいあが蝙蝠達に話す。
「そうでなくても五代さんは凄くいい人だにゃ」
「うん、それはわかるよ」
「よくね」
蝙蝠達もだ。そのことはわかるというのだ。
「僕達にたっぷりと御馳走してくれたし」
「こうしてお話していてもわかるしね」
「それにしても仮面ライダーなんだ」
「話は聞いてるよ」
「えっ！？」
毛利君と小森君の今の言葉にだ。五代は思わず問い返した。
「君達仮面ライダーのことを知ってるんだ」
「うん、吸血鬼さんから聞いてるから」
「バンパイアさんからね」
「何か。向こうもですね」
「知っているのだな」
五代と一条はここでもだった。顔を見合わせてだ。
そのうえでだ。話をするのだった。
「まさかとは思いましたけれど」
「最初から知っているのか」
「これはまさか」
「覚悟しておくか」
こちらを既に知っている、そのことから吸血鬼はスサノオの分身かその統率下にあり仮面ライダーと敵対しているのではないか、こう考えてだ。

そうしてだ。彼等はだった。
「若しそうなっても」
「勝たなくてはな」
「そうですね。絶対にですね」
「勝とう」
「それでどうしたの？」
「何かあったの？」
まただ。毛利君と小森君が二人に尋ねてきた。
「何か吸血鬼さんに用があるの？」
「それで僕達に用があるみたいだけれど」
「うん、そうだよ」
「それはその通りだ」
こうだ。二人も二匹にはっきりと答える。
「それでだけれどいいかな」
「吸血鬼は今何処にいる？」
「まさかと思うけれどまた向こうから出て来るとか」
「そういうのはないな」
「今お城にいるよ」
「吸血鬼さんのお家にね」
流石に今回はそれはなかった。そしてだ。
二匹の話によるとだ。吸血鬼は。
城を持っていてそうしてそこに住んでいるというのだ。それでだ。
彼等は今度はだ。こう言うのだった。
「じゃあ今から？」
「その吸血鬼の城に行くか」
「そして万が一の時は」
「腹を括るか」
こうしてだ。覚悟も決めてだ。あらためてだ。
毛利君と小森君にだ。頼みをした。
「それならその吸血鬼さんのお城に今から」

「案内してくれるだろうか」
「うん、いいよ」
「それじゃあね」
彼等も応えてだ。そうしてだった。
吸血鬼への城に案内するのだった。その二人にだ。
にゃんぱいあ達もだ。こう言ってきた。
「じゃあ僕達もにゃ」
「ああ、行くか」
「そうですね。面白そうですし」
「行きましょう」
あっさりとついて行くことにした。とりわけ。
にゃんぱいあはだ。とても楽しそうにだ。こう言うのだった。
「命の恩人に会えるなんて楽しみだな」
「そういえば兄上はずっと」
「そうだにゃ。会いたいと思っていたにゃ」
こうだ。満面の笑顔で茶々丸に言うのである。
「だから凄く楽しみだにゃ」
「それなら余計にですね」
「行きたいにゃ」
こうした話をしてだ。にゃんぱいあはとりわけ楽しそうに吸血鬼の城に向かうのだった。

第三話　受け入れる器その八

だが、だ。ふとだ。五代がそのにゃんぱいあ達に尋ねた。
「長い旅になるかも知れないからね」
「何だにゃ？」
「どうしたんだ？」
にゃんぱいあとまさむにゃが彼の言葉に応える。
「何かあるのかにゃ」
「別に何でもないだろ」
「君達の御主人達に連絡しておかなくていいのかな」
彼が言うのはこのことだった。
「それはどうなの？」
「ああ、その心配はないよ」
「すぐそこだから」
また毛利君と小森君が話してきた。二匹は五代の頭の上を飛んでいる。
「もうすぐ見えてくるから」
「安心していいよ」
「あれっ、近いんだ」
「それはまたな」
二人はそう言われてだった。
いささか拍子抜けした。そしてそれは。
にゃんぱいあも同じでだ。こうまさむにゃに言うのだった。
「あれっ、こんな近くにいたのにゃ？」
「歩いていける距離だよな」
「そうだにゃ。それだけの距離だにゃ」
実際にそうだとだ。まさむにゃに話すのである。
「本当に意外だにゃ」
「身近な人だったんだな」

「これならもっとお家の外をしっかり散歩しておくんだったにゃ」
「まあそれは仕方ないぜ」
まさむにゃは前足を組みとことこと歩きつつ述べた。
「俺達の移動範囲って限られてるからな」
「縄張りの中でしか動けない筈だな」
一条は猫の習性から話す。
「もっとも猫の縄張りは広い場合もあるが」
「この辺りは一応縄張りにゃ」
「俺もだ」
「僕もです」
にゃんぱいあだけでなくまさむにゃと茶々丸も答えてきた。
「これでも結構広いんだぜ」
「他の方と重なってる場所もありますが」
「僕も一応」
カツオもおどおどとしながらだが話す。
「この辺りは」
「僕に縄張りは関係ありません」
にゃてんしはそうだというのだ。
「何しろ元天使ですからね」
「それでこの辺りに気付かなかったのはどうしてかな」
「縄張りでもあまり行かない場所もあるにゃ」
だからだとだ。にゃんぱいあは二人に話した。
「それでにゃ」
「成程、そういうことなんだ」
「だから誰もその城には気付かなかったのか」
五代も一条もこのことがわかった。
「猫といっても色々あるんだね」
「はじめて知った」
二人もだ。知らないことは多い。所詮人間の知っていることなぞまさに大海の中の一杯のスプーン程度のものしかないのである。

そのことをだ。二人は今再認識したのだ。
そうした話をしながらだった。彼等はその城の前に来たのだ。その城は。
如何にもだった。実に不気味な城だった。
西洋風であり石造りだ。苔や蔦が壁を飾りやたらと古い。
塔もあり窓はやけに頑丈そうだ。そしてやけに細く曲がった木々に囲まれている。何かの動物の咆哮まで聞こえてきそうだ。
その城の門のところに来てだ。二人は話した。
「ここはまさに」
「吸血鬼がいる場所だな」
「この如何にもって場所に吸血鬼がいる」
「俺達の手懸りになる」
こう話してだ。そのうえでだ。
彼等は門からどうして城の中に入ろうと考えはじめた。その中でだ。
ふとだ。カツオが二人に言ってきた。
「あの」
「うん、この城に入るには」
「どうすればいいかだが」
「チャイムがありますけれど」
カツオはいつもの少しおどおどとした調子で二人に話してくる。
見ればだ。

第三話　受け入れる器その九

門の左の柱、ダークグレーの石の柱にだ。チャイムがあった。音符のマークまでついている。それを見てだった。
二人はだ。やや拍子抜けしてだ。顔を見合わせてからだ。
そうしてからだ。こう話すのだった。
「何か。今度も」
「拍子抜けするものがあるな」
「そうですよね。吸血鬼っていうからさぞかし危険な相手かって思いましたけれど」
「これでは一般市民と変わらないな」
「じゃあチャイムを押しますか？」
五代が提案した。
「そうしますか」
「そうだな。とりあえずはな」
一条も五代のその提案に頷く。そしてだった。
五代がそのチャイムのボタンを押した。するとだ。
暫くしてだ。チャイムの向こうからこう返事が返って来た。
「はい、どちら様でしょうか」
「普通の声ですね」
「そうだな」
「新聞なら間に合ってますよ」
まずは新聞のことから話してきた。
「東スポ取ってますから」
「あれっ、朝日じゃないんですね」
「読売でもないな」
「とりあえず新聞はいいですから」
まただ。返事が返って来た。
「それなら帰って下さいね」

「新聞屋さんじゃないにゃ」
にゃんぱいあが下からその声に言った。
「僕達は吸血鬼さんに会う為に来たにゃ」
「僕に？」
吸血鬼と言われるとだ。すぐにだった。
声はだ。今度はこう返してきた。
「僕に何か用かな」
「はい、実はですね」
「貴方に会いたくて来た」
「セールスマンもお断りですよ」
今度はこう言ってきたのだった。
「それなら別に」
「だからそういうのじゃないです」
「猫について聞きたい」
五代と一条は今度はこう声の主、吸血鬼と思われる彼に述べた。
「貴方が助けた猫と一緒にいるんです」
「それで聞きたいことがあるのだ」
「ああ、そのころですか」
吸血鬼の声は実に素っ気無いものになった。
その素っ気無い声でだ。彼はまた言ってきた。
「ならいいですよ。お城の中に入って来て下さい」
「いいんですね、そうして」
「今から」
「はい、どうぞ」
ここでも素っ気無くだ。彼は言ってきたのだった。
「御待ちしています」
「よし、それじゃあ」
「今からな」
二人は話があまりにも簡単にいっていることに首を捻りながらもだ。それでもだ。

にゃんぱいあ達を連れてだ。そのうえでだ。
門を開け城に向かう。城の左右の木々は今にも動かんばかりの姿だった。

第三話　完

２０１１・８・２４

第四話　吸血鬼の話その一

第四話　吸血鬼の話

五代と一条はにゃんぱいあ達と共に門を潜り城に向かう。その途中の道は。

左右に木々が生い茂りその中から何かが出そうな気配がある。その気配についてだ。

五代はだ。こう言ったのだった。

「猫に蝙蝠かな」

「そうだな。そうした気配だな」

「特に危険な動物の気配はしませんね」

「吸血鬼の使い魔達か」

「はい、そうですよ」

「ここには僕達のお友達が一杯いるんです」

毛利君と小森君がそうだとだ。二人に話してきた。相変わらず二人の上をぱたぱたと羽ばたいている。そうして話してきているのだ。

「血を少し貰う以外は全然危なくないですよ」

「皆大人しくていい子ばかりですから」

「吸血鬼といっても人に危害を及ぼす奴だけじゃない」

「そういうことか」

二人はまたこのことを確認させられた。

「俺達も吸血鬼に対する偏見があったみたいですね」

「吸血鬼も人の心があれば」

どうなるのか。一条は自然にこのことについても話した。

「人間なのだからな」

「ですね。姿形がどうであれ」

「心がそれならば」

「その人は人間ですね」

「仮面ライダーと同じく」

だからこそだ。わかるというのだ。
そのことを話してだった。彼等は。
その古い城の前に来た。その入り口は。
今にも朽ち落ちてしまいそうだ。その入り口を開いた。すると。
鈍い、きしむ音がした。木の扉が開き。そしてその中は。
暗い。そこからは何も見えなかった。
「まるで洞窟だ」
「ですね」
五代は一条のその言葉に頷いた。
「そしてこの奥に」
「吸血鬼がいるのか」
「いえ、もう来られてますよ」
「あちらから」
しかしだった。またしても毛利君と小森君がだ。二人に言ってきた。
するとだ。その暗闇の中からだ。
黒いマントにタキシードを着てだ。金髪を後ろに撫でつけた男が出て来た。
肌は青白く顔は幾分やつれた感じだが整っている。目は紅い。その彼が出て来てだ。五代と一条に舞踏会式の挨拶をしてきた。
それからだ。彼はこう二人に言ってきた。
「はじめまして、吸血鬼です」
「五代祐介です」
「一条薫だ」
「猫のことですね」
吸血鬼は頭を上げて二人にまた言ってきた。
「そのことですね」
「はい、宜しければ」
「そのことについて話してもらえるだろうか」
「わかりました」

にこやかに笑ってだ。吸血鬼も応えてきた。
そのうえでだ。二人とにゃんぱいあ達に述べてきた。
「いいでしょうか」
「はい、それでは」
「何処に」
「城の応接間に来て下さい」
それでだ。話をしたいというのだ。
「飲み物も用意していますので」
「血かにゃ」
「いえ、コーヒーです」
吸血鬼はにゃんぱいあにはこう返した。
「人間の方々には。僕はトマトジュースです」
「じゃあ僕達は何にゃ？」
「君はトマトジュースですね」
吸血鬼はにゃんぱいあを見てにこりと笑ってだ。こう述べたのだった。
「若しくは苺ジュースでしょうか」
「どっちも大好きにゃ」
「では僕と同じトマトジュースで」
同じものをだというのだ。
「それを用意しましょう」
「有り難うにゃ。流石は僕の命の恩人にゃ」
「毛利君と小森君もそれで」
彼等にもトマトジュースを分けるというのだ。
「そうしましょう」
「はい、有り難うございます」
「ではお言葉に甘えまして」
二匹も応える。かくしてだった。

第四話　吸血鬼の話その二

二匹の飲み物も決まった。まさむにゃ達にはミルクを用意するとだ。吸血鬼も話した。

全て決めてからだ。一行はあらためて城の中に入った。城の廊下は暗い一歩先すらもわからない様な状況だ。しかしだった。

吸血鬼はその暗闇の中を何でもないといった風に進んでいく。その彼の動きを見てだ。五代と一条は彼の背を見ながら話をした。

「流石ですね」

「闇夜には何もないか」

「ですね、見えてるんですね」

「そうだな」

二人でだ。言うのだった。

「ちゃんと」

「道が」

「はい、見えています」

実際にそうだとだ。吸血鬼も答える。前を向いて進みながら。

「私の目はそういう目ですから」

「吸血鬼は夜でも見える」

「だからか」

「そうです。私は吸血鬼です」

そのことを話し。さらにだった。

「仕事は手品師です」

「手品師！？」

「仕事もあるのか」

「人の世で生きるのなら」

それならばだとだ。吸血鬼も話してくる。

「仕事は必要ですから」

「だからですか」

「仕事も持っているのか」
「はい、猫達の餌代もそれで得ています」
そのだ。仕事からだというのだ。
「そうしています」
「成程、つまり貴方は」
「自分を人間だと考えているのか」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。二人に答える吸血鬼だった。
そうした話をしながらだ。彼等は応接間に着いた。そこはごく有り触れた品のいい部屋だった。二人はそのソファーに座った。
向かい側のソファーには吸血鬼が座る。にゃんぱいあ達はソファーの周りにそれぞれたむろしてだ。話し合いがはじまるのだった。
二人にコーヒーを出しトマトジュースを飲みながらだ。吸血鬼が話す。
「それで御二人は」
「はい、別の世界から来ました」
「そこで戦っている」
「ああ。じゃあ噂は本当だったんですね」
ふとだ。こんなことを言う吸血鬼だった。
「それぞれの世界が入り組んでいるんですね」
「えっ、まさか」
「知っていたのか」
「はい、聞いています」
そうだとだ。吸血鬼は少し驚く二人に話す。
トマトジュースを飲みながらだ。述べていくのだった。
「吸血鬼の集まりの中で」
「その中で聞いたのですか」
「我々のことを」
「仮面ライダーですね」
吸血鬼の言葉だった。

「貴方達は」
「ええ、俺がです」
五代がだ。内心驚きながらも吸血鬼の問いに答えた。
「仮面ライダー、仮面ライダークウガです」
「やっぱり仮面ライダーの方でしたか」
「それでこちらにお邪魔したのは」
「何故僕が困っている猫達を助けるかですね」
「吸血鬼としてにしても」
「好きだからですよ」
吸血鬼はあっさりとした笑みでだ。それが為だと答えた。

第四話　吸血鬼の話その三

そのうえでだ。こうも話したのだった。
「昔から動物は好きなんですよ」
「何かそれは」
「人間の会話ですよね」
「はい、そう聞こえます」
「僕は元々人間です」
今度は屈託のない笑み、気品のある顔にそれを浮かべてだ。
そうしてだ。さらに話すのだった。
「死んで。何かの力で吸血鬼になったのです」
「あれっ、僕と同じだにゃ」
ここまで聞いてだ。にゃんぱいあが述べた。
「僕は吸血鬼さんにそうしてもらったけれど」
「そうそう、実は同じなんだよ」
吸血鬼は今度はにゃんぱいあに顔を向けて話す。
「僕の場合は死んでからだけれどね」
「そうだにゃ。同じだにゃ」
「ということはまさか」
「貴方を吸血鬼にしたのは」
五代も一条もだ。そこまで聞いてだ。
「スサノオでしょうか」
「スサノオ？」
「あっ、この世界では名前も姿も変えているかも知れません」
「つまりだ。神だ」
一条はスサノオをこう表現して吸血鬼に話した、
「人を見て楽しむ神だ」
「人をっていうと」
「君は死んだと今言ったな」

「若くして。病気で」
そうなったとだ。吸血鬼自身が話す。
「けれど。そこを助けてもらって」
「その君を助けた者がだ」
「そのスサノオですか」
「僕達吸血鬼を生み出したんですか」
「そう考えていいだろう」
一条は真剣な面持ちでその吸血鬼に話していく。
「実際にこれまで多くの種族をそうして生み出してきた」
「種族っていいますと」
「つまりです」
ここでだ。さらにだった。五代がだ。吸血鬼に話してきた。
「俺達の世界ではそうして多くの勢力を生み出してきまして」
「我々はその様々な種族と戦ってきた」
一条もこのことについて話す。
「そうしてきた」
「そうだったんですか」
「俺が戦った最初の種族はグロンギでした?」
「グロンギといいますと」
「戦うこと、いや人間をることを文化とする種族で」
忘れられなかった。五代にとってグロンギとの戦いはまさに運命だったからこそ。
だからこそ忘れられずにだ。彼は今そのグロンギのことを話すのだった。
「そうして最後に生き残った者が彼等の主と戦う文化だったんです」
「またそれは変わった文化ですね」
「それがグロンギという種族でした」
そうだったとだ。一条は話す。
「そしてその主が」
「そのスサノオですか」

「はい、そうです」
まさにそうだというのだ。
「その時はン＝ダグバ＝ゼバでした」
「それで五代さんはそのン＝ダグバ＝ゼバと」
「闘いました」
究極の戦士になって闘った。このこともまた五代にとっては忘れられないことだった。
「そうして戦いを終わらせました」
「そのスサノオがですか」
「貴方を吸血鬼にしたのです」
「いや、僕も含めて」
吸血鬼はそのグロンギの話を聞いてだった。
そのうえでだ。戸惑う顔になりこう話した。

第四話　吸血鬼の話その四

「吸血鬼は人を特に襲ったりしませんよ」
「血を吸うだけですよね」
「なかったら苺やトマトとかで充分ですし」
この辺りはにゃんぱいあと同じだった。
「ですから人に対して危害を加える様なことは」
「スサノオは人間と戦っているだけではないのだ」
「ああ、見ているんでしたっけ」
「そうだ、見ているのだ」
一条が吸血鬼に今度話したのはこのことだった。
「その様々な種族との戦いを見てだ」
「それで？」
「人間を見て、そしてその退屈を紛らわせているのだ」
「じゃあ僕達吸血鬼も」
「にゃんぱいあも含めてだ」
一条は彼も含めてきた。
「君達は見られているのだ」
「人間としてですか」
「スサノオはいつも見ているんですよ」
一条と交代する形でまた五代が話す。
「人間が。姿形を変えられてです」
「僕みたいに」
「果たしてその種族のものとされている性格になるか」
それと共にだった。
「変わらない姿の人間が彼等とどうしていくのか」
「そうしたことを見ているんですね」
「そうです。ですから」
「君達は」

こちらの世界の吸血鬼達のことだ、今一条が言ったのは。
「人間としてこの世界に生きているな」
「ええ、楽しく」
「そして猫達を助けているな」
「困っている動物を助けることは当然ですから」
「それだ。君達は全て見られていたのだ」
一条は真剣な面持ち指摘していく。
「何もかもだ」
「そうだったんですか。それで」
「それでだな」
「僕達は合格したんでしょうか」
今度は吸血鬼が尋ねた。五代と一条に。
「その人間に」
「はい、スサノオから見ればですけれど」
「合格しているだろう」
二人も吸血鬼にこう答えた。
「この世界の人達も含めて」
「そうなっていると思う」
「そうですか。じゃあ僕達は人間なんですね」
「はい、紛れもなく」
「その心が人間だからだ」
それも心優しい。それが吸血鬼の心だった。
「ですから合格したと思います」
「あくまでスサノオから見ればだが」
「そうですか。じゃあ僕としてはですね」
二人に言われてだ。吸血鬼は安堵した顔になった。
そしてそのうえでだ。こうも言ったのだった。
「このまま人間として生きさせてもらいます」
「はい、そうされて下さい」
「是非な」

「わかりました」
吸血鬼は満足した面持ちで頷いた。そしてだ。
その彼にだ。五代と一条は。あらためてだ。
彼に対してだ。こう尋ねたのだった。
「それで、なんですけれどスサノオの」
「君を吸血鬼にした彼のことだが」
「はい、あの人のことですね」
「一体どちらにいますか？」
「この世界の何処に」
「月に一回吸血鬼同士で集っているんです」
吸血鬼は二人にこのことを話した。
「そこにマスター。僕達を吸血鬼にしてくれた」
「スサノオも来る」
「そうなのか」
「そうです」
まさにだ。その通りだというのだ。

第四話　吸血鬼の話その五

「ではその会合に」
「御願いします」
「連れて行ってくれ」
「わかりました」
吸血鬼の返答もすぐだった。
「それなら。早速今夜ありますので」
「よし、それじゃあ」
「その会合に行こう」
「そうしてスサノオと会って」
「その目的を問い詰めるとしよう」
ここでも。スサノオと戦うつもりだった。
そうしてだ。早速その夜だった。
今度はだ。吸血鬼が彼等を案内した。
その道中でだ。五代と一条はだ。
先に進む吸血鬼にだ。こう尋ねたのだった。
「それでなのですが」
「君達のマスターはどういった姿をしているのか」
「それです。一体」
「どういった格好なのか」
「それですね」
吸血鬼もだ。彼等のその言葉にだ。
すぐにだ。こう答えたのだった。
「服装は僕と同じでして」
「タキシードにマント」
「それか」
「はい、これは吸血鬼の正装です」
そうだというのだ。彼が今実際にしている格好はだ。

「二十世紀初頭から決まっているんです」
「あれっ、昔は違ったの」
カツオは吸血鬼その話を聞いて述べた。
「そうだったの」
「そうだよ。昔は正装も違ったんだよ」
「というとどんな服を着てらしたんですか？」
「昔の貴族の礼装だったんだ」
かつて着ていたのはそれだというのだ。
「僕達は闇の貴族とも言われているからね」
「だから貴族の礼装なんですか」
「その時代ごとのね」
「それでタキシードなんですか」
「マントは翼みたいなものだよ」
マントについても語られた。
「これはね」
「マントはそれなんですか」
「そう、僕達は空も飛ぶから」
ただしこの姿で飛びはしない。宙に浮かぶことはあってもだ。
それでも吸血鬼本来の姿で飛ばない。それならばだった。
「蝙蝠に姿を変えてね」
「ああ、だから僕の背中に蝙蝠の翼があるにゃ」
にゃんぱいあはここで自分のその背中のことがわかった。
「それでだったにゃ」
「そうだよ。吸血鬼は蝙蝠にもなれば」
それに加えてだった。
「狼にもなれるし霧にもなれるし」
「何だ？結構変われるだな」
「吸血鬼の能力は多彩なんだ」
まさむにゃにもこう話す。
「だから蝙蝠にもなれて」

「それでマントもあってか」
「そういうことだよ。ついでに言えば」
今度は吸血鬼の方から話した。
「僕達はこうして日の下にいても大丈夫だよ」
「そうそう。それ位では何でもないんですね」
にゃてんしはだ。どうやらそのことを知っていたらしい。
それで実際にだ。こんなことも言った。
「カーミラさんや伯爵さん普通にいましたからね」
「あの人達は吸血鬼の中でも名士だよ」
この吸血鬼も彼等のことを知っていた。しかも名士だというのだ。
「素晴らしい人達だよ」
「そうですよね。あと大蒜も」
「あれが通じるのはスラブの吸血鬼だから」
吸血鬼のルーツの一つはそこにある。東欧にだ。

第四話　吸血鬼の話その六

「僕は大蒜とトマトを使ったパスタも好きだから」
「そうそう、トマトに大蒜を入れると余計に美味しいんだにゃ」
またにゃんぱいあがこのうえない笑顔で話す。
「僕も大好きだにゃ」
「そう、パスタもいいね」
吸血鬼はさらに上機嫌で話す。
「イタリア料理もいいよね」
「吸血鬼にイタリアというのは」
茶々丸にとっては。それは。
「あまり合わないと思いますが」
「あれっ、そうかな」
「ルーマニアとかならともかく」
「ルーマニアもラテン系だよ」
イタリアと同じくである。実はそうなのだ。
「だから別に構わないじゃないかな」
「では好きなものは何ですか？」
「パスタの他には赤ワインで」
吸血鬼は茶々丸のその話に応えて言う。
「あとは鮪のお刺身も」
「和食も好きにゃ？」
「だから日本にいるんだよ」
そうだともいるのだ。
「和食が好きだからね」
「ううん、やっぱり何ていうか」
「人間的だな」
五代も一条もだ。あらためてだ。
吸血鬼自身の話からだ。彼が人間であることを知ったのだった。

そのことを知って話をしながらだった。
一行が辿り着いた場所は。そこはというと。
「あれっ、ここって」
「そうだな。ホテルだな」
「はい、ホテルです」
豪華なホテルだった。帝国ホテルの様な。
そのホテルの前に来てだ。また話す五代と一条だった。
ホテルは白い巨大な姿を彼等の前に現わしていた。まさに聳え立っていた。そのホテルを見上げながらだ。吸血鬼が話した。
「ここのパーティー会場で、ですね」
「会合ですか」
「その吸血鬼の」
「はい、それが行われます」
こう話した。しかしだ。
ここでだ。黒と金色の制服を着たホテルマンが来てだ。彼等に言ってきた。
「お客様ですね」
「あっ、はい」
吸血鬼がそのホテルマンに応える。
「今日パーティーに招待されていた」
「確か」
ホテルマンはここで日本人そのものの名前を言った。するとだ。
吸血鬼は大きく頷きだ。こう返したのだった。
「それが私です」
「わかりました。では案内させて頂きます」
「それとです」
ホテルマンは手慣れた動作でだ。今度はだ。
五代と一条に目を向けてだ。こう言うのだった。
「こちらの方々は」
「連れです」

「お連れの方々ですか」
「はい、ですから」
「わたりました」
ここでまた和風な名前を出し。そうして吸血鬼から五代と一条に顔を向けて。
そのうえでだ。こう彼等に話した。
「ではです」
「いいんでしょうか」
「我々も参加して」
「はい、どうぞ」
すぐに応えたホテルマンだった。
そしてだ。今度はだ。
にゃんぱいあ達も見る。彼等を見てからだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7982w/

仮面ライダー　エターナル＝インフィニティ

2011年10月8日03時12分発行